

嬉遊笑覽

卷十上

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
| 一 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 八 | 九 | 十 | 和書門 |
| 三 | 二 | 一 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 八 | 類 |
| 冊 | 架 | 函 | 號 | 類 | | | | | | |

| | | |
|---|---|---|
| 三 | 三 | 和 |
| 九 | 六 | |
| 兩 | 七 | |
| 一 | 二 | |
| 八 | 五 | 書 |

| | | |
|------|-----|--------|
| 内閣文庫 | | |
| 番號 | 和 | 36725 |
| 冊數 | 13 | (12) |
| 函號 | 209 | 109 |

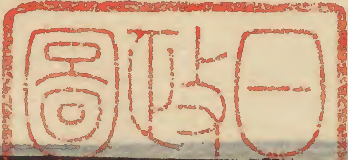
十二



嬉遊笑覽卷十上

喜多村信節撰

- 飲食 (飯 臺 ひめ 熊本立 七五三 菜 龜足 別足 物の食やう 六 四足類
 料理 獸市 楚割 包み焼 昆布巻 雉子やま 狸汁 まぎ焼 糰糰 登やま
 肴干 さくく汁 いとこ煮 笹輪 和雜輪 かせちわへ 酢むつかり わさびおろし
 異制 稻荷祭供)



飯を臺といふ女房詞なるへし源氏物語夕雲落葉の宮の不食なるを消息所のすゝむる所おはとなふらな
 どいそき参らせては臺なとこなたふてまゐらせ給ふものさこしめさすとき給ひてどかう手つからまか
 なひなほしなとし給へどふれ給ふへくもあらず(なほすとい裂ひしりなどするよや今も病人小兒などふ
 いかくしてあとふ又切るといふ言を忌てなほすといふなり)同巻夕雲の館の處たれもくも参だい参り
 などしてのどかふなりぬるひもつかた橋姫卷大將宇治より歸らむとする處はかゆこいひなとまいり
 給ふと有こといひひ古の常の飯なれと粥をいふ故ふるれお對してかくいへるなるべし海人藻芥ふ公家参
 膳飯ハ強飯也執柄家等如此姫飯全分略儀也但人々依好悪用之資益王日記ふ明應十年正月條諸社ノ遙拜ノ
 後三獻アリ次ニ看經次ニオコハ次ニ比目和名抄編糰和名比女或説云非米非粥之義也とわれバひめハ今世
 の常の飯とみえたりは臺と作膳といふとかなじ食ハ必ず臺を載るものなれバなり

○幸ありて富貴なる人といへども飲食を節用せんと衣服居住よりも第一よ心得常ふ凍餒のと思ひて
 わが分お過さず精粗美悪も得たらんまゝ不安んじ用ひて擇ふとあるべからず悪食穢食をも忍びなバ凡百
 の嗜欲を抑へ制せんと何の難さといわらん

○方外の事ながら澤庵が晝飯の何のたりも食ものそひたるきを止めむために喰ふものひたるきとなく
ひくふて入らざるものよそへ物なくて飯のくこれぬいまだ飢の來らざるなりもし飢來らそ精糖も撰ぶ
べからず受食如服藥せよと佛も遺教したるよ衣食住の三ふこそ一生をくるしむれ此心あるより我ハ三の
苦みなし

○武家にて晝飯くふと昔いなし其も動きはたらく者へくひしなり今昔物語など晝の養へ往し見えたれ
と夕飯は見えずこれ又多く二食なるよや籠耳艸子侍ハ中食といひ町人のひるめし寺がたふハ點心道中
はたごやふてハ晝息みといひ農人の勤随所方ふてハ女中のとこふハ晝供御といふこれをあやまりてお
こいと云ハわるしといへれとさばかりも非ず

きのふはけふの物語をんりやくじの小ぼうしゆとまき過て山へ木葉かさふ行とてちこのちうまきをせんた
なふわけをき其下お小ぼうしゆひるめしもおきて云く小法師をら山へ行さまからごさまこよゆひるが
ゆ座る丸をうつたらバこしめせと申云く

○捕尻お城間中世の書ふ五本立七本立といふ膳あり今いふ七五三のと敷予云膳部家ふ聞り五本立といふ
臺盤七本立といふ七膳なり聚樂行幸ふハ九本立なりしとかや其饌具等甚美を盡したるとよて是を禮家饗膳
と云予もこれを傳へ侍れと饌多なる故略之七五三ハ唯三膳なり秋草に七五三の膳といふを今世知らぬ人
ハ本膳といふ七つ二の膳といふ五つ三の膳といふ三つ付ると思へり(安齋隨筆ふ地下よて規式の膳部
七五三といふハ本膳ふ菜數七つ云く何れも汁ハ數の外なり香物も數の外なり五々三といふも右ふ准じ知
べし五三々また同じ右ハ三の膳までとなり五の膳七の膳までも出と時ハ七五三といひひがたし菜數多
くあるなり然れを今世さい數のこを七五三五々三などいふハ誤なり七五三の膳部といふハ別のとなり

大草流七五三膳部配を見て知べし)夫ハ七本立五本立三本立といふの數のとあり七五三の膳部ふハあ
らず七五三といふハ先三といふ式獻なり膳三つ有(引渡し打身といりなり)五とハ五獻出すといふ其五
獻ハ初獻ハ烹雞(皿ふもるなり)添肴あり二獻まんぢう添肴あり三獻あつもの(すひ物のと)四獻むしひき
(冷麥ぬる麥時節ふよるべし)添肴あり五こんやうかん(又すひせんうんの類)添肴あり右の膳いづれも組
付もの有七といふ飯湯づけふてもおなじ)七の膳迄出すといふなりこれの食物の調練ハ庖丁の家ハ傳へ
て故實あるとなり武家の知るとふあらずとあり按るふ貞順故實條々三目五目七目八目といふと
あり三目目一より三迄三膳五目目一より五迄五膳以下これお准すいづとも一ハ本膳なり各一組づハ
の膳なり七五三ハこれ幾本立といふを幾目目といひたる献(八目目ハ九目目の誤ならむ)老人雜話ふ信長
齋藤の所へ聳入の處ハ七五三式法を用と有り七五三ハもと奇數を用偶數を忌よりのこと思へるハ七五
三の膳立を書たるをみるハ本膳ともハ四膳あるあり菜の數ハ増されども誤なるべしまた五本立七本立ハ
膳部ふて菜の數をいふにあらす類聚雜要御箇固六本立の圖あり又後三年合戰繪なをみるハ古への膳部
ハ高き臺ふて食物のみなかとらけお盛たり居やう中お飯を高盛おして置そのまよりお菜を排べたり海人
藻芥ふ毎日三度の供御ハゆめぐり七種汁二種なりゆ飯ハわりたる強飯を聞召なりとあるもその弊おな
らべたるもれ故菜をゆのぐりといふおり菜ハ數ある故お後世これをおかずと云ト養千句おいり昆布ふ
又よろまふのかかずふて旅の客付おはしといひん又雜要抄をみるハ臺三つ盤四つ有てもこれを三本立と
いふ五本七本も皆臺おつていふなり菜ハあまたあり大臣大饗ハ人數多きふよりて一脚の机を二人よて

用ひたるもみゆ調味故實僧の膳も幾本立と云といわり三本立五本立も打身ハすまはをバをへす只
うち身ばかりをすふる也とあり

○説文曰饋以羹澆飯也これ汁かけ飯なりこゝみてむかし汁をバ飯ありけてくひしなり武者物語北條氏
康の前ふて嫡子氏政食の相伴の時氏政一飯汁を兩度かけたる物がたりありまた梅卿貴人よりとやく
汁なぞかけず湯をのむとも見合てこしを下あかくべしなどいへり

○龜足といふとわし申などおさしたる物の申の本を紙よて巻て其餘をひねり置てくふ人の手を汚させ
ぬためなり調味故實ふさめといふハ魚なり磯あり盛と口傳ありさそくあるべし庖丁聞書筋打といふハ
鶴を毛なしえまきの方より刀目と入て引さけバ能ころふさけるなりあふりて龜足をさして添着などみ出す
なり又梅焼といふハくづしを梅はとあまるゆ湯ひきたれみそみて味をつけて脊のりを衣よつけて梅の枝
に指て龜足付を添着なぞみ出すなり又くうら焼といふハ鯛のひれを申ふ巻つけ焼て龜足を付添着み出
すなり(この外猶多くみゆ真願故實條々魚の折の中み上りたるハさそくの折たるべし惣てさそくの折ハ
賞断よてはまた龜足の物給やうの事給ひを左の手のうへ右を被下時戴さくひ振て給ひ事候是ハ淨酒
の時のとなり只給ひ時ハ左の手あて振ひて受用ひまれも人の覺悟あ依て相替ひとあるをみれば申ふさし
たる看みあるとみゆ庖丁聞書向の菜ハ五種の削物焼鳥云々龜甲又ハ土器ハ高立して盛なりとあり古
圖をみるハ六角の折あり是なるべし故ハ龜足も龜の足ふ形どりし名と聞ゆ又おもふふこのともと別足よ
り出しなるへし

○物を食ふ法あり古事談ハ徳大寺の大饗ハ宇治左府令向給時如法令食給云々事畢之後別足ノ食樣見習
ハントテ人々群寄見ケレハ欄目ヨリハ上ヲスコシツケテ切タリケルヲカママリタル方ヲ一口令食給タリ
ケリ(大臣大饗ハ大臣ハ任せられたる人外の大を正客ふして百官を相伴ハ招き饗應あるなり正客の大
臣を尊者といふ別足といふ鷹の捉たる雉の股をいふ雉必やき鳥あそるなり多く刀目を入れて足のさを紙よ
て包むなり)膳の下たる時人々打よりてくひのこされたるをみる安齋云古の人の禮儀古實を貴びし故如
此事も心をつけて見習ひしなり今世の人ハ風俗かるくしく鼻の先智慧のみみて食物のくひやうの法な
どハあざ笑ふ人多しといへり又著聞集に文治のころ後徳大寺の左大臣右大臣よおひしける時徳大寺の亭
み泉水をかまへられて中御門左府へ案内申されければわたり給ふけり云々盃酌すこん有てゆきたかめし
いたされて縁ふ候して鯉きりたり左府ゆきたかめし給ふけるハ鯉調修するやうをバ存知たりとも食
やうをバえらじくみてみせむものしたまいけりまことふやう有げにてめてたかりけり人々目をさまさ
すといふことなし

○式作法の外物くふも心ぐべき事あり雖知苦庵道三養生物語ハ四條繩手よて正行ガ敵ハ後ろを射さ
せなからまづかみ竹葉をつかふと云と天晴なる勇將とおもへり梅窓曰うういやるで思ひ出した木村ガ上
方勢をおつ立たいきはひより討死の時大手の前あて敵の方へ尻をむけ牀儿ハ腰をかけて手の者五六人ま
んまるおして大佛餅を手ふく持まづかみ食ていたその跡との外見事あつた雨のふるやうな矢玉の中
でのとじや云々不斷まづかみ物と食ならぬいそがしき時落つて食れぬものじや食物が脾胃へおさ
まらず首のまはりある物じやといへりこハ英雄の振舞なれど併しながら又ならぬもよるなるべし
○まゝといもつハ猪鹿をいふ天武帝四年莫食牛馬大猿雞之肉以外不在禁例云々上つ代ハ天子も聞しめ

婦遊笑覽卷十上

しぬれど中古より穢に准へたり續古事談(四)兵庫頭知定といふ陪從が娘ふ八幡の神つきて詫宣ある處森
 鹿さらふくふべからずと有もこの知定なども日頃鹿をくひけるを誠じとなり江談(二)奥鹿穴當日不可參
 内之由見年中行事障子而元三之間供御藥御齒固鹿或猪盛之也近代以雉盛之也(類聚雜要供御齒固鹿穴
 代用水鳥猪穴代用雉とあり)又上古明王常膳お用給又大饗おも用との止たる制何の時よりと儲お知
 らぬ由みゆ神供お春日の若宮へハ狐狸を奉り諏訪の明神へハ鹿を供ふる古へよりのことと上さまお
 物し給ハぬ事となりても其餘ハ女さへくひたりとみえて今昔物語お住丹波國者の妻讀和歌語お後の山の
 方お鹿の鳴けれハ男今の妻の家お居たりける時よて妻お此ハ何と聞給ふると云けれハ今の妻煎物にて
 も甘し焼物おても美さ奴をかし又調味故實ハ懷妊の間いませ給へき物しうく有てうさぎ(是も懷妊お
 りてより隨生の百廿日の御祝遇るまで忌べし)鹿もろくの魚頭云々庖丁聞書盛合せぬ品々猪に兎云々
 尺素往來巡役の朝飯明日令勤仕ハ云々四足者猪鹿^{カサレ}野熊^{ヒメカサレ}猫^{ネコ}等と魚鳥よりも初めお奉たり海人薬芥お四
 足ハすべて不備之然るを吉野天子後村上院ハ四足をも憚らせ給ハず聞召けるとかや四足の内おも狸汁ハ
 賞翫の物と見えて親元日記(四)寛正六年十二月朔日御被官廣戸但馬入道進上と有これを汁おすると守
 武千句また大草料理書等おある事ハ雜考の中お載たればこふ云々料理物語 寛永中の刻)狸汁野としり
 ハ皮とせぐみたぬさハ焼そぎよし味噌汁おて仕立ハ妻ハ大こんごろう其外色々古法ハ味噌汁ハあらす
 酒のかす酒搥を用たり貞徳ガ狂歌腹までもまた入たらすうましとて舌つやみ打たぬき汁かな(精進おも
 此を學べり後ふいへり又他物をもて似せ作るを何もせさと云もの色々あり虛粟集妄語戒と一品句^{ゴト}低を
 煮て河豚お賣る世の辛さ哉今いふふぐもせさなり)また同書獸之部鹿ハ汁かひやきいりやきはしてよし
 狸ハでんぐく(山椒みろ)猪汁ハでんぐくハわし蒐ハ汁いりやき川うをかひ焼すハ物熊ハすハ物でんぐく
 いぬハすハ物かひやきとあり犬ハ鷹おも飼人もくひしなり徒然草ハ雅房大納言鷹おかハんとていきたる
 犬の足をさりたりと謔言えたる物語あり文談抄ハ鷹の餌お鳥のなま時ハ犬を飼なり少し飼て餘肉を損せ
 させじとて生なぐら犬の肉ををぐなら後世も専まれを用ひたりとみえて似我蜂物語お江戸の近所の在郷
 へ公より鷹の飼入とて犬を郷中へさしれけるといふ物語あり續山井たかハ峯のつら餌となるな犬さ
 くら(宗房)ましくふたむく犬ハ鷹の餌食かな(勝興)友山の落穂集お我等若き頃迄修當地町方お於て犬と
 申者ハ稱ゆて見當不申事ハハ武家町方共下りの給物おは犬お増りたる物ハ無之とて冬向お成ハハ
 見合次第打殺賞翫致すお付ての義なり(是故お近在迄も求めしとせまらる)これらのとありし故お犬を殺
 す事を禁せられたるより此風止て昔ハくひたりと聞おあるまじきとのやうおおもふいどよまことなり
 うし三州岡崎お獸店ありしとなり夷曲集(正成)獸のみうとをといでみせ棚のこハやかしこお岡崎の町お
 かし江戸四谷お獵人の市立ありしとて是故お今も獸店といふあり類柑子お腸を搥おさけふや雪の猿哀猿
 の聲さへたてぬなりけり昔四谷の宿次お獵人の市をたて猪かのおまハ羚羊狐貉兔のたぐひをどりさかして
 商へる中お猿を搥おけおしていくつもの引上て其さま魚鳥をまつうへる様なり云といへり(これお昔
 どわれハ當時ハなかりしとせまらる延寶天和のまろおもやありけん養賣の出来しハ明和このかた歎
 ○庭訓往來お鱒楚割安齋云をとりと訓ハ非也すハやりとよびし魚肉を細長く割て搥おしたるをいふ
 楚ハ木のすハるなりすハ之の如くほろ長き意なりすハ之を略してスハヤリといふ魚を背より見るど
 うも説ハ妄言なり和名抄云魚條云く讀須波夜利本朝式云楚割云く條もえだといふ楚と同意なり東鑑(十)

嬉遊笑覽卷廿七 四 辰 自 刊 辰 量 書

文治六年十月十三日條云於遠江國菊河宿佐々木三郎盛綱相添小刀於離楚割居折敷以子息小童送進御宿申云只今削之令食之處氣味頗懇切早可開食歎云殊御自愛彼折敷被染御自筆曰まぢえたる人のなさけもすいやりわりなく見ゆるこゝろさしかを接るふ今加賀の産みすぢ魚といふものあり鯛の骨を去りて搥干ふしたるものなり是即ちすぢやり也すぢうをとの條魚を馴るなるべし古へも初より細かみ作りしものありあらぬなるべし削り物といふも此類の物をいふなり正しくすぢえわりなるをえわの反やどなれべすいやりといふ其故は彼歌もすぢえわりのわりなくと續けるなり

○つゝみやき和名抄魚字をよめり宇治拾遺云天武の吉野に在せし大友の妃たりし皇女鮎のつゝみやきの内ふ文を入れて奉りしこと見ゆ又新撰六帖いよしへいともかしましかたふふなつゝみやきなるなかの玉づさつゝみや焼の物つゝみやみて焼なり醒睡笑自墮落の條法師繪を反古みつゝみや焼て飯をそへて食へむとすと有せてむし焼あするをいふなるべし應仁別記落書云貞親の近江の浦の鮎なれやめあまかれてそいふ入ける是は今の昆布巻などよや

○精進物を肉菜ふならひて作るもの可笑記(三)あさる浄寺へ参る色よの料理なるふきじやきのたぬき汁のどとしめくこいかなるとよやと心空よてみれをさるな精進物の浄菜なり寺かたの料理だて心得有べし料理物語ふきじやきへとうふをもちいさくきり鹽をつけうちくべて焼なり此製古きと見え宗鑑々犬筑波集しやうじの汁ふまじるふまやうじ雑やきをよくくみれば豆腐あて淀河ふ此句あ付て不審たつはよまつ白なまは注ふきじ焼のやま鹽付る故なり(これをあもへばまとの雑やきも鹽やきなるべし)又たぬき汁ハ獸の歌合五番左狐つかの穴ももん右たぬき汁のこんふやくと有り今も菟藪を汁ふ煮てしか呼なり篋絨輪寮の窓つまの雫さじ扇なり結句理汁ふをけるこんふやく芙蓉文集桃鏡と云ものこんふやくの文あ或へたぬき汁と化して舌つゝみやを打する一際風流ゆきたなり又鴨焼のとも雜考いへり精進のハ庖丁圖書鴨壺といふハ生茄子のうへみ枝みて鴨の頭の形つくりて置なり柚味噌も用どあるハ糶まとの鴨を用ひたるさま残り其後ハ名のみにてもの形なし料理物語鴨やき茄子をゆてよまころにさり申あさし山椒みろ付てやくなり慶長このかた今の形となれりともゆ寛永癸卯帳徳元句あ鴨やきやなすひなれどもどり肴佐夜中山集鴨やきいかならず秋の茄子哉

○鱒鶏ハ庭訓あ出つ安齋云此もの知れざる故金地院あ尋ねしふ其答書云煎鮎式ふ有之即鮎鮎以淡醬煮者也と云といへり

○壺やきハつがいらといふ寛永癸卯帳霞くひそのつばいりやふし肴

○ささふ雜考の内ふ笥干を句養なるべしといひしハ非なり林逸節用ふも笥干と出また親元日記(三)寛正六年七月十一日小島向殿(飛彈)笥干一箱進上云あり本草あ酸笥といへるこれなり料理物語えゆんかん竹の子をよくゆふして色よくふきりあはひ小鳥かまぼこたいらぎ玉子ふのやきわらひさだらり右の内を入だしたまりみて煮いてよし又竹の子のふしをぬきかまぼこの中へ入表してきり入も有といへりこれハ今の如く生の竹の子を用るといふゆれどもどの文字のとく乾たる筍あてありしなり

○太宰氏經濟録ハ曆本ふ二十四氣を替つけたれば是あて推て七十二候の知るとなり今曆本ふ餘候を記載せず半夏生の一候を載す半夏生ハ夏至の第三候なり夏至より第十一日あ當る半夏生此時より生ずるとなり今俗説ふ此日を過て生たる筍ハ虫を生じて竹あならせ此日天より惡露ふる是故あろの筍を食へせと云



俗説あり凡七十二候を書つけなば皆かくべし半夏生ばかりかけらへいわれなし

○鹽なき年後撰集(十五、雜一)鹽なき年たゝみわえてと侍りければ忠見しはといへばなくても辛き世中
ふいかあわえたるたゝみなるらん

○さくく汁世話盡(四)予正月七日か或天台宗へ參侍て菜汁を振まひれて云寺てくふくじやくざくの
菜汁かな菜を鹿相お切てせしむるを世人詞よさくく汁といへり又彼宗の根本空寂之法を以肝要を
そ然を玄やくさくといひしハ兩意の挨拶なるべき歟(料理物語ふ蓬をさくく切なといへり菜を切る
音なり世話盡の承應三年の撰なり)

○いとこ羨今江戸の俗十二月八日二月八日あいとこ羨の汁を製るいつの頃よりの習ふかいとこに汁の
古きものなり寛永料理物語あづき午房いも大こんとうふやまぐりくわい杯入中みそあてよしあやふお
いふ申ふよりいどこに歟と有いつと定りてする物ども見えす又此をおこ汁と云ふのけふ事始事納
の日なれば名づけしなり然るを骨董業の音なりといふの似よれるをもて附會せる説と聞ゆ石原正明が甲
子隨筆江戸ふて二月八日十二月八日汁を羨る云く尾張ふて二月の不さたなり骨のなき物をくふとなり
と云ハッ講とて無實の難を免るゝ義なりと云傳へたり蠟八ハ釋迦成道の義也と云ハ附會なりおこ汁
ハ何事ならんと年ごろ不審なりしを山雲國ふてハ十二月十三日ふ煤どりなどやうのこをしめて芋さん
あやく赤小豆等の汁をくふこれを事始と云さて年神を祭りて正月廿日おかみ餅を撤却して飯を供す是
を飯くらへと云二月一日繪を供す是をなますくらへと云繪くらへ七日ありて八日ふ年神の棚を取るこれ
を事納といふ十二月と同日汁をくふといへりまこれふて事ハ正月のとなるとも初終もよくわかれたり

といへり事始の條いへり見併すべし二事一つ混じると年中の行事ふ多し又いとこ羨をむしつ汁と
いへるいふ汁といふをかくあらぬといふなるべし汁ハ芋から赤小豆を入たる汁なり今のいどこ
ふいもぐらへ入されども用ひしとも有しより此名を呼しものならんふしハ芋からのとなり女重寶記大和
詞の内いもの驚あづきの汁いふをつけどありふし汁なり又ことづつ汁と云ハ醒睡笑ふとろ汁の出たる
を座敷ふ古人ありてけふのことつて汁いふまざり一入出きたりとはむる是ハめづらしきとやど其
子細をどへいさればよ此汁あていいかはとも飯かすゝむ故よくいひやるとのえんよことつて汁といふな
らんもありま汁の名これらも似つかんし

○むくち汁ハ鹽一后の千向あつまるハ同じむくちの類ふして瓜やなすひや夕顔の汁思ふ何みまれ小く
四角お切たるを采のめと云これ汁のみとするなり

○笹繪庖丁家書お鯉鮒すゝ鮎なとをするなり皮をひくお依て笹繪と云なり笹ハ川を引の謎なり庖丁聞
書お鮎の笹繪といふハ鮎をおろして細つくりにして柳の葉をいかだの如く皿おならべをのうへお作りた
る身をもりて出すべし柳の葉さき人の左又ハ向へなるやうお敷べしとわれハ兩義なり今蘆の莖を笹お作
るも杜撰ふわらす

○和雜繪かざるなます夏の料理なり洛陽集和雜なます麩の酢たゝへて藍の如し永樂料理物語ふかんさう
なますますさよりかれいゑいゝかなせ色よつくりませし事なりみれハ酢しほかけんしてあへけんばか
りたくべきなり又藕汁と云條おせんばねぬきかせちあへ又あをぢらと云ハ雉子のわたをたゝきみそを
すてし入なべお入てきつね色はどああるまでいりなべをすゝぎさてだしをいれお立またい鳥をいしほか

げんすひ合せ出ひなりとあり前の製すも調やういとなれどあをかちなりかつとハ難るをいふもどからあへなるべきを字音の紛れてかさうと云ひしを詠りてかんさうと云りせちあへど云もせもし誤れり又おもふ嘉定の日などこれを作りしりバかじやうなますともいひけんをもとより和雜と書しなればかたハ混しあやまりて字音のやうふかさうとなりしり字音なればくじさうなり音訓のちあへなます也

○酢むつかり宇治拾遺并ふ古事談(三)ふも出たり慈惠僧正戒壇を築きたる物語み淡井郡司僧膳のれうふ大豆をいりて酢をかけたるをなみし酢とバかくるそと問はれければ郡司云わたゝかなる時酢をかくればすむつかりとてふがみてよくとさまるゝなり僧正云いかなりともなしかへえさまれぬやうやあるべき投やるともとさみくひてんどありけりいかにさるとあるべきとあらがひけり僧正かち申なをことゝあるべうらす戒壇を築て給へどありければやすきとて煎大豆を投やるよ一間ばかりのさてお給へて一度も落さずとさまれけり袖のさねの唯今まはり出したるをませてなけやりたるをうとさみすべらかしたまひたりけれどおとしもたてす又やがてとさみといめたまひける(この内袖のさねのと見ゆればまの酢の袖の酢とまじる今もなかあてハ木の實を酢み用ると多し)武州駿西の邊にて今もすみづかりとて調べて道祖神などお手向るよし委しくも聞きしりささいつ頃日光山に詣て其邊にて用る初午おろしと呼吸物をみて其名のいふかしくて尋ねしよ此器にて二月初午おすみづかりといふ物を造るおよりて名づくといへり其器の形よのつねの蓋擦ふ似て松板にて作りあまた竹釘を打て釘の末を兩方より諸刃の如く削りたりすみづかり調る法ハ大根を此器にておろし水にて洗ひよく牽り大豆を熬皮を去て酒粕を能播流たるど三種交て煮る暫くして醬油を加へ鹽梅とハのへて是を稻荷の祠に供すその供へやうまづ藁苞を二つ作り一ふハ赤飯を一ふハすみづかりを入れて苞二つ合せて一ッお結付るなり此ハ上野國沼田といふ處の一平塚稻荷ハ其邊にての大社なり關東惣社と稱す二月初午より日後晴天三日をつらねて祭日とす若その三日雨天なれば日を延すとなり此初午及三日ふ近在より彼すまづかりを持來りて社頭お備る事夥き故本社前ふ四斗樽を并べ置て是ふ入しし樽お滿たるをバ竹の笊にて水お漬洗ひて豆をかりを取て味噌お造る社家年中の食料とするお足れりとなひ竹木にて造たる大根おろし今一種あり先年下總佐原より古たるを得たり是ハ兩股なる木の枝を用削りたる竹お鋸齒を刻み二またの木の間お横お并べて兩端を釘お打付たるものなり是も竹釘のも大根のおりたる様おなと佐原にてハダリノおろしといふ駿西にて用るも是なりといへり日光にて此製のと尋けるに此地にてもその如く作れるも又箱お作りたるも有といへり調やうおかわりたれども是件の酢むつかりの遺製なり本朝文鑑ふ九咄が醋徳頭お煎豆とハ中あしく大根おろしとハ明暮またしといへるハ酢むつかりのこをおほめかしたりと聞ゆ

- 後段 點心 飯の湯 鬼毒み かよひ 香吻 奈其漬 澤庵つけ 脹表 すつほう 櫻表 駿河表
- うどん豆ふ茶碗焼 すぎ焼 板かまぼこ 下踏と焼みそ とんへい 宇治丸 うなぎ なまづ すつ
- ぼん 賣表 江戸料理茶屋 奈其茶 百膳 淡雪豆腐

○秋草お飯の後ハ麵類もて何おても出すを今世ハ後段といふ後段といふ名目ハ古へなきとなり何を出すともそへ肴をして幾獻と云なり後段などいふ詞ハ田舎詞なり鶴こんといふ詞を知らぬ故なりげお古くハいそぬ詞なり是も七五三といふといひ出し此かたの名目とみゆ料理物語お後段の部あり其品類すはいたんご雜煮などなり古くハ雜煮なども初獻お出しハなり庖丁聞書お魚羹とハかんを魚の形おして盛

龜足指すなり惣して羨へ四十八わんの拵糧有といへども多く其形およりて名有といへりこれ後にいふ後段の品も也同書湯藥の方あり又點心の粉と云もの有り此粉藥を點心と覺へたるふや點心ハ輕畀録なぞふ見えて食後の小食なりといへり先の蒸くわしの類を點心とするなり七十一番職人盡歌まひちうをてんまんとよめり沙石集ふ或僧人の請用お趣ところ本より食者なれハ食後の菓子までかひくしく行ひけりといふとわり是又點心なるべし今食後の引菓子足ふれり此時香煎湯なぞをも飲へければ件の點心の粉その料ふや今俗飯の湯ハ亭主より飲始るを禮とす安齋云古書ふ湯に限りて亭主より香初るといふ禮なし客のもてなし飯計ふて終にあらざれば飯の湯の時亭主隙なる故出て相伴するといふいこれなしといへり毒味の藥物のみお限らぬとながらそれを毒味えたとなどありて例ふなりたるが毒味するを鬼といふも久しきとなり甲陽軍鑑(一)大身衆振舞の時必亭主おを仕尤なり云々

○著聞集ふ左京大夫顯輔卿のもとへ或人ことをしておくりたりけるよ櫻花かざしなごえたりけるを僧どもおほらうらみくらひける云とわり此のよと云ハ僧の夜食なり無住が雜談集(三)お昔ハ寺と只一食ふて朝食一度えけり次第お器量弱くえて非事と名けて日中お食し後ふハ山も奈良も三度食す夕へのをハ事と山おいへり未申の時ハかり非時して法師原坂本へ下りぬれば夕方寄合て事と名づけて我ハ世事して食すと云りとわり世上の俗ハ三度して夕食おればまれと世事と云ふや事とハ世事を省きて云るなるべし

○太平記佐々木道譽が奢侈のことをいふ處異國の諸侯ハ遊宴をなす時食膳方丈といへりそれよ劣るべからず迎面五尺の折敷ふ十番の菜肴點心百種五味の魚鳥云々飯後お旨酒三獻過て茶の懸物お百物百の外お又前引の置物をしけるお初度の頭人ハ奥藥物各百宛六十三人夕前おつむ二度の頭人ハ色々の小袖十重宛三番の頭人ハ沈の七百兩宛麝香の贖三宛添て置云々一様お是を引以後の頭人廿餘人お勝れむと様を替敷を盡て山の如くつみ重ぬされハ其費幾千万と云とを知らず是をも賣て取て歸らハ互お是を以て彼お替たる物共とすべし友に連たる遁世者見物の爲お集る田樂猿樂傾城白拍子なんとお皆取られて手を空くして歸りしかば云々ありこれらの前引物ハ客より出す物共なり

○今世飲食を持ハこふ者をかよひといふ古きとなり宇治拾遺瀧口道則習術條おりつるやとあひしつる郎等また沙石集ふ(一)阿彌陀利益條女童かようしける(二)在家人豐干禪師お申て拾得を呼てかようなんとせさせける云々同事なれば語も同じかるべしさらばかようハ假字の誤なり

○香の物秋齋問語お香物ハ生大根お限る物なりとい何ふよりたるおかおはつがなし新猿樂記お香疾大根とあるハ香物なるべし江戸芝の金地院おて毎歲正月元日より三日までの膳部ハ香物生大根の輪切二を用ひしとぞ(今ハあさ漬大根をかへ用ふとなり)これハそのかみ軍中の學びおて平生の事おハあらず又日光山の強飯お出すハ生大根四五寸ハかりハすお切たるなり是ハ種々の辛味を集めたる内なれば香物おハわるべからず後撰夷曲集澤庵和尚の歌おて大ううのものといきけぬかみお打つけられてしほくとなる續の原おいさ哀なき町中の鹿(映水)紫の繡漬軒の月すさき(寒風)これハ奈良づけなり今澤庵漬といふ香物ハその和尙の製法なりとぞろのかみ此法を關西の國おてハ知らざりしと見えて貝原が日本歳時記お香物の製しやう多く載たれどもみな今の法にあらす十月條お蘿蔔(千本)細糍(一石)麴(三斗)鹽(二斗五升)とわりこれおてハ大根百本糍一斗麴三升鹽二升五合なりかくてハ久しく貯へたし其うえ重しをおく事もいハす又法大なる蘿蔔(千本)鹽(三升)入おしをかけ置てなれたる時用是より鹽多けれハあし糍

麴なども入へからず是又今の淺つけども異なり又法羅蘭をよく洗ひ三日ほどほし毎夜席をおほひ葉ふ少し赤み出て後さつと洗ひ水氣なき時漬る大根一過ならべ鹽を大根の少し見ゆる程ふり其上お麴をふり段々おつけおしをかけ置べし又右の如くつけて後酒粕米糶搥をつき雜右の大根を水ふて洗ひ乾たる時つける尤よしといへり其頃大かたこれらの法と用ひしなるべし

○甲陽軍鑑(十)公界々みの奥山家の分限なる百姓料理するすべもしらす海老を汁おし鯛を山椒みそふてあへ鴈白鳥を焼物よ鯉を菓子ふして蜜柑をさしみすれバ能肴どもいづれを取ても喰ふべきやうなく皆捨る云々是究めて有ましき料理をいふなり鯉を菓子といふのまことさもあれ其餘のと亦然ともなし名へ今も昔も同くて製し方變りたる物いと多かるべし脹煮の料理物語あなまことを大みきりだしたまりふかせ出しさまよ入其儘もるとなりすつぼうともいふ鮑鳥賊もよし(調味抄も此法にて鮑いかの事なし)調味抄へ鱒の條ふくら煮の如常と有へ上のしかたをいふなり今すつぼうん煮といふ此すつぼうふて土籠を専くふやうおなりて名へまかひたり(其故りすつぼうん煮といへど其煮やうとなる事なく何をまかく煮るふはのみすつぼうん煮といへるへすつぼう煮といふ事ありしが是あまがへるなり)同書櫻煮鱒をうすく切さしと煮る江戸煮ハ一寸ばかりお切煮酒等分おして久しく煮る半お醬油酢を加ふればやわらうみなるといへり(西川祐信繪本笑の種おたを江戸おせいといわるゝお依て大分の鱒を江戸荷お作ると有)今もこの定なれと江戸もそのかみり然らず料理物語櫻煮ハたこの手ばかりいかみもうすく切だしたまりあてさつと煮申なりとあれバ櫻煮ハもど此法なり柔かみ煮ハ駿河煮と混じたるなり同書するが煮たことをよく洗ひ其儘だしたまりお酢を加へいのはぬくる迄よく煮とある是なり又今そバ切豆腐といふを昔へうとん豆腐といひ茶碗蒸茶碗焼といへり是等もふど開てい迷ひぬべし

○後撰夷曲集花お酒月お芋くふ春秋も冬ふいかにすま焼の鯛(行重)櫻陰秘事お杉焼のまのり振舞まて町衆四五人參會伊呂三絃お面お杉焼も鯛青鷺ならでい喰れすと云お杉焼と云お二種ありこれの料理物語おへぎやきといへり鴨を大きおつくりたりまかり置て皮を煮身とはさみ入一枚ならびおきやくとなり又調味抄お杉の箱又面おとも和鼓おとぶろく加事もあり鯛もしくは鱒鱒鮭取合お葱よく煎て又後卵餅を入煮と有面おといへるお面お杉焼なり是右の杉の折櫃なり又一種ハ一代男お杉板おつけて焼たる魚お定の銷漬梅色何の蓋云(其外鴈の板や鴨の板やさ有り)調味抄おかまお竹お巻形を名とせり近代杉板よし(是はと雍州府志おも云り)と云る是なり竹輪おまおこの名ハ櫻陰比事おみゆむおしのかまおてハ燂熱るとなく焼たるものなり石屋の宗山お明曆の火災お違たる記録お正月十八日本郷お弓町料理する人ありてそれをくひお行たるお火事起りて庭お火のこ落る勝手お行て見いへバ膳立出來汁などもりかけ是あり庭お長火鉢を置杉大板のかまお焼おし有之みを客三人おてこれを懐お入膳棚お菓子盆お見事なる枝柿蜜柑鉢おつみおけり是を懐中してとや此家お火かへりお故事庄お暇おすさ云々あり娘容儀ハ享保二年の卯子なるおやきたてのかまおこお生醬油つけて板おちかお云々いへり是よても知べし又板おて味噌を焼とあり伊呂三絃お乱酒の事をいふ處おすひのしお小板の焼味噌漬いとしおほたておありやとさしつさおれつ云々日光山の邊おてハ常焼おそハ板お付て焼なりその板の形羽子板のやうおて表お横お鋸おて筋を引その上お胡麻なせ入たる味噌を付爐中の灰お立ておふるお鋸の筋目ある故みを落す按るお世話お下踏お焼味噌といふと不審なりしが是にてさとりぬ聊似たる形あれといたく異なるをいふ

九

なりはんべいといふ名もむかし聞へず肉羹のをもよしとすれは海鰻餅なるべし調味抄に蒲挺の條下
體かまぼこ仕様大鰻といふものあまし中鰻の京みて歩荷といふよし云々見ゆともへいあよろしか
らぬ故まかいふ歎の音る詞は多しとちくまやうといひ唯畜生のとなりとせうばねいと背骨なり京難波ふ
てたまといふほど願なるがたままた大なるをづうたいといふも是なり大なるがあく跡なればなり

○鬼みそ太平記八幡託宣の條の落書唐橋や鹽の小路の焼しそ桃井殿の鬼みそをすれ是は焼みその辛さ
なり今天竺ひしほと云の種々の辛味を入たるひしほなりいふ心から過て天竺不至るとなり

○宇治丸の鰻の鮮みて右名高きものなり今の入らなきふ醋を忌といふいつの頃よりいふとも聞
えず調味抄繪に用へき魚云々鰻やきて細く作り鰻酢おろし大根芹うど栗生薑ほけの酢大いひべしとあ
り唯木瓜の酢を忌を常の酢もいひやうふ誤りしなりうなさを焼て買家むかし郭の内ふなかりしとろ

新增江戸鹿子(寛延四年撰)深川鰻名産なり八幡宮門前の町にて多賣る云々池の端鰻不忍池にて取ふあら
ず千住尾久の邊より取來る物を賣なり但し深川の佳味ふ不及といへり此頃迄いまだ江戸前うなぎといふ
名をいそす深川に安永頃いそやといへるが高名なり耳袋小濱町河岸の大黒屋といへる鰻屋の名物あ
りといへり天明頃の事あやまれちや修府内あてうなぎやの初めなるべし京師も元禄頃迄よき町ふにかを

やまなかりしふや松葉端歌よ朱雀かへりの小歌ふ松はら地りのかとやまめすまいかと身きものあいへ
り鰻魚の寛永の料理集ふも載たれど是は近在あるを廣く擧たる物なり大和本草箱根より東ふ是なし
と有これも又誤りなり日東魚譜よ昔は江戸ふなまづなかりしが享保十四年九月井頭より水溢出たることあ
りし其より鰻魚出來けるよしみゆ増補總鹿子往昔の此魚關東ふへ曾てなかりき享保年中より甚多くな

れり西國のなまづといひ其形や異なり關東ふて下品の人のみ食す(西國の産と異なりといへるは非な
りいづくも色れりのあるあり)鰻魚を載ざるのまれもいと下品のものにて買ことも稀なりしふや寛永
料理集ふ真龜は吸ものさし石かめも同じいへる真龜のすつぼんをいへり浪花ふてともどより好て食た
るものなり諸詭大鑑(二)世渡りとして丸魚突ふなつて天満ふおのしける其繪をみるよヤスをもて突て取な
り元禄曾我伏見船の乗合ふて京の人と大坂の者と物争ひする處大坂の人料理したすつぼんがあるが京人
くし鹿子や紅染の都でなければならぬ云々京の其頃迄すつぼん食ふもの希なりしを知べし諸藝太平記

(四)元禄十五年板遊女かをいふふたどへ納戸でとすつぼんの料理をまいらうともそれのしりてがない
云々又元禄十七年草子誰袖海ふ京人江戸ふ下り居たる處寒さハ鶏卵さけふ足すつぼんもくひならひ
鶏のなき内これまもと云々あるをみるふ下賤の食物なりそれより寛延四年の江戸鹿子新增迄ハ五十
年ふ近き小産物の内ふかすまへいれぬハ鰻よりも劣りたるものにてありしなり寛永七年草子伽羅女ふ
新地堀江の料理茶屋にて鰻のかばやき丸龜まいる云々難波ふて其頃うなぎと井び行へたり江戸の下
手談義お賣卜者のこといふ處柳原の長堤お泥龜の煮賣と軒をならべと有寛延寶曆の頃ハ此休あて投簀の
小屋にて今の山鯨の風情よりあさましき買物と見えたりハ是故ふや今の價うなぎよりも貴けれどよさう
なきやふハ是を賣らす

○鰻魚高價なる故近時蝦蟇の肉を雜へて賣れると有とど古もかゝるたぐひのとあり今昔物語大刀帶陣ふ
賣る姫の語蛇と切て拙を付て賣れるとを載て其跡遂ふなくて切やならび魚賣むをハ廣量ふ買て食へしと
可止となむあり又料理茶屋ハいと後迄も稀なりし事と見えてまのふけふの物語或人十二三なる子を籠

類聚新編 卷之十 十

愛して常々諸を教へけるがせつかくならへやがて十月十三日ふなるぞ百はたごくひあつれて行そよく覺へてその時うたへといふほどなくかめいろうとて寺より案内ある云々寛永已前料理などして賣をむとたごといひしよや望一后の千句爪や茄子や夕貌の汁立よるへ五條わたりのやす旅籠

○女の料理人宋人撰み鳴谷設録に京都中下之戸不重生男毎生女則愛護如捧璧擊珠甫長成則隨其資質教以藝業用備士大夫採拾娯侍名目不一有所謂身邊人本事人針線人堂前大劇雜人折洗人琴童棋童厨子等級截手不素就中厨娘最爲下色然非極富貴家不可用これより已下ある厨娘料理するありさ物の費多きととも委まゝくまゝせり其用る處の鍋釜盃勺湯盤之屬小婢をして先捧して行しむ耀爛目耀耀くみな是白金もて作れり刀砧雜器も一々精緻厨娘へ團襖圍裙銀索藥臂を掉て胡床に據坐す切抹批摺慣熟條理具も運斤成風の勢ありなきいへり

○江戸にて料理茶屋といふものむかしへなし(寛文の頃迄もすくなかりし寛文八年申の十月中町中諸職人諸商人共茶屋并借し座敷をかりより合相談仕いと相聞ひ自今已後左様の者さまき借ひ者共借し申間敷い凡ふれと江戸中を南北中を分ち月番あかへるく三げんより觸出す此時此方中通を觸る茶や一軒もなし)西雀か質土産(元禄六年板)近き頃金龍山の茶屋一人五分づゝの奈良茶をまだしけるお器物されいふ色々といふへさりとて末々のもの、勝手の手より事となり中々上方ふもかゝる自由なかりきとありこれへ寛文のころけんどん蕎麥切出來てそれお倣ひて惣食飯といふも出たり江戸鹿子食見頼金龍山品川おもたかや同所かりがねや目黒と并ひ職又奈良茶堺町おんや目黒かしへや淺草駒形ひものや是なり事跡合考明暦大火の後淺草金龍山待乳山なり)門前の茶店お始て茶飯豆腐汁煮煮染豆等をどゝのへて奈良茶と名付て出せしを江戸中としくゝよりも是をくひひゆかんとて殊の外めづらしき事ふ興じたりそれより追々さまゝの美膳店出來しよりいつしう彼聖天の山下の奈良茶衰微ふおよびたり(江戸鹿子金龍山とあり家名なし元禄會我物屋三谷かよひの路次ふ丸屋へともなひ先取あへす出す杯けんどん奈良茶のわけを立る云々)江戸鹿子奈良茶へ別お出して金龍山へ食けんどんとありおもふお他の奈良茶の今の如く一せんめしめて一椀づゝの定なるべし金龍山の其後よき料理えたりと見ゆこのさきの奈良茶やどの異なる敷衣食住の記お享保半頃迄途中て價を出し食事せむ事思ひもよらず煎茶もなく殊お行掛りお茶屋へ料理いひ付ても中々出來せず其頃金龍山の茶屋おて五匁料理仕出し行がゝりふ二汁五菜を出す入ふ好みお隨ひこの外をやる其後兩國橋の詰の茶屋深川洲崎之神明前をどふ料理茶や出來堺町おて一人前百膳といふもの出きてより是又所々お出たり湯島祇園豆ふ女川菜飯居酒やの大田樂湯豆腐始る賣屋の始より吸もの小付飯大平えつばくのうまみ金龍山の料理へ跡なく夫より宮地端へおひたせくわけて明和のころより辻よ軒を并ぶる(安永の頃より辻賣の油おげ焼肴餅菓子唐菓子一夜すしくさゝ筆お及てすと云り)明和八年ころ深川すさきお捕やき場を開き兩國橋づめと云今もある中村屋洲先の升屋奈助なり是へするりの淺間の坊叔阿彌と云ものよなれんか

○總鹿子増補お淡雪豆腐兩國橋東詰日野や東次郎享保の初淺草並木町西側よりづりなる豆腐有て初て製しけれへ人ももてとやさでいつしう跡なくなりぬ其後湯島切通し山田屋權兵衛とこの日野や同時お賣初いづれも繁昌せし中おも日野やも稻荷の神威有てよりますく繁昌する事をうらやみ隣の土舟屋看板暖簾方の道具迄紛へしく拵らへ根元本家などゝ知らぬ人を欺く云々

十一

十二文茶づけの傳通院前ふ辰己屋とて出たと少初めなりとぞ

田樂 菜飯 麥繩 冷麥 熱麥 入麵 庵丁汁 蒸雜 蕎麥 むしろバ切 けんどん 大名けん
どん 提重 忍ひ慳實 うどん桶 温飢 梅干 二八を七 夜たかをバ 風鈴 まつはく 手打
高西太郎道光庵 ひさしや麥斗庵 夷宮

田樂ハ田樂の曲ふ驚足とて竹馬の如きものを一本立て乗るとありその形ふ似たるをもて名とするといひ誰
もえれりされども田樂の豆腐のさりのた昔ハ今の如くありあらず古圖をみるふ丸く切たるなり今の茄子
のまき焼の形ふ似たり但一切づ、申あさすなりこれを後ふハ四角ふ切たる儘あて角を落さず申と半バま
で割うけたり是を爐中の灰ふ立置てあふり焼なり此さぞ田樂のすがたなり醒睡笑ふ此事を云て夢庵の歌
たかあしをふみそこなへるめんぼくを灰まふせ冬のでんぐくと云るを引たり今ハいつの物と定りた
る事もなければと大かたハ春夏秋冬をむねとするやう也昔ハ冬のものなり宗長手記大永六年十二月の處ハ夜も
ふけ爐邊ふひさをならべ田樂たうふの盃たひかさなりて云く(其頃ハ田樂豆腐といひしハさもあるべき
となが)醒睡咲ふ比叡山北谷持法坊ふ兒あまたあり冬の夜豆腐一二丁を求め田樂あする云くみな寒夜の
賞翫なり飯の菜酒の肴もあらず唯茶うけなとの慰ふしたる事も有きのふハけふの物語ちと法師よりあ
ひでんがくとあふりなふ、ても三つとねたるをいひて賞翫せんといひてうんらんんの南蠻陳せんさ
んひんの神泉苑などいひて昔一申づ、取られける云くまた或夜てんぐくをして秀句みて賞くじんする
ふ大ちと清盛の長刀なんぐいつくし新發意佛のつふりなそく、みくし小ちと醫者の本尊なそく、やく
しなどわり此秀句ハ新撰狂歌集貧僧弟子とかくせんふて田樂をして弟子ふハくハせす我ハかり食けれハ

雲林院 仙山

新發意今の間ふ佛ハ二時出きたりばうすハやくし我ハくわんをんといへるをどれり寛永發句帳一村ダ句
寒き夜にわふりくふべき岡部かな近くハ温故集百里ダ句田樂のあとさひじまを冬籠祇園の田樂古く有し
ものなり望一千句でんぐく申の竹のふしやうさ腰鏡を祇園参りふおとし來て同后の千句にたりやまたり
豆腐をそくふもる、と祇園の前ふやすらひて田樂りならす菜飯ふ添こくふハ寛永ころよりなるべし懐
子やく田樂あ身もこがれつ、來ぬ人を待ふこされハ菜飯まで菜飯ハ似せもの語ふをらふあける菜飯ハい
つもくひじうとけふの花見も似るこめもなしむりしハ花見遊山などハ菜飯をたきて持ゆけりおあん物
語其時分の軍ダ多くてなふも不自由なことでおじやつた面々たこハへもあれどおはくハ朝夕雜承をたべ
ておじやつたおれダ兄様折々山ハ鉄炮を打ふ参られた其時朝菜飯を炊て晝めしよもたれたわれらも菜飯
もらふて給ておじやつた故兄様をさい、す、めて鉄炮うちあ行と嬉しうてならなんだ土御門泰邦卿東
行話説目川あて時ふ群集して喰ける菜飯田樂我もこのもしく云々白き扇のた、んでつまいとこがしたる
やうなるをもて來る人の目川忍ひてをどくひて見たれと思ひの外味なくぞ有ける當風あハぬ大さる
でんぐくハひかしのなめし残すため川

○麥繩今昔物語むき繩の蛇となりたる物語ハ夏の頃麥繩多く出來たるを客人とも多く集て喰ける云々
れハ冷麥ゆるべし康富記文安五年八月十五日條二獻冷麵居之綱指身居之望一后千句中ハからまど泪ふ
はれそひなきダ手向ふなせる冷麥
○又あつひさ有職人盛歌合てうさいのこしきのうへのわつむきのむしわけのせとの月わたるみゆ索麴賣
の歌なりあつ麥ハふうめんをいふ(冷麥と冷さうめんふうめんとうとんと異なるハ近世の事なり)宣風卿

記文龜二年正月廿五日内裏御月次和歌御會云々被召御未賜入麴天酒等とあり(天酒甘ハ酒ふや)

○庖丁汁筴埃隨筆日向より薩摩に至る處や夕餉まで平温飽に茄子やうの物をうすき味噌汁を煮たる
なり亭主云是ハ此國の一調味あり卑き品なれども頗據わり昔此邊大友宗麟領せられし時俄ふ菊地肥後守
來會あり取あへすせし事なれば蛤の腸を汁に調えて出さむとす然るも菊地思ひの外多人數みて其用意足
らずいかいせんといふ人教へて如此作らしめて中を足したりいつれも分りたかりしをれより名をばう
てう汁と呼も蚌腸とすことよしを誤りて庖丁汁と覺えしと語る其製至て無造作なり小麥の粉を搥すこ
しやわらかめふして氷めて練り暫く布なを覆ひて寐さしひれば粘るなり其内ふ醬汁をうすく煮て茄子瓜
の野菜をも入置かの粘りたる粉を手の内ふ少づ丸め持て引の心せを長く延らなりをよき程づい
引まり直ふ汁の鍋に入手なれしもの甚平らお延し平うどんのやうにするなりといへり此説附會なるべ
し是ひかしの入麴なり又庖丁の煮名ハ雜の誤りなるべし梅窗筆記ハ煮雜とハ今の雜煮餅のとなり御厨子
所預記宗國記明應六年十二月七日(取要)三獻公家衆ボウザウとありといへり今の雜煮餅と定むるもい
がなり何ふてもくさく煮たる故るべし然らば雜炊と云も似たることよ其なぐら雜炊ハ野卑なるものな
るべし上杉上州平井お在城のとき出仕の人の下部共平井の民家に充満し誰かし初るともなく背を引て手
すさみふ蓑を織て家主おとすれば家主よろこび大鍋をのろりおかけて湯を炊て下部共豆粟菜かぶら何
ふても一品づ打込て煮る故よこれを雜炊と云へりとなり

○蕎麥ハ續日本後紀承和四年七月令後内國司勳種蕎麥此時迄諸國お多ハ種さし事とみゆ搥尻(卅)そを
切ハ甲州より始る初天目山へ參詣多かりし時所の民參詣の諸人お食を賣けるお米麥すくなかりし故そを
をねりて旅籠とせし其後うとんを學ひて今のそを切とハ成しと信州の八かたりしと云われハ近きとハ
みゆそのかみのそをがきのましたるみや夷曲集お蕎麥搥餅出ける座おて玄旨法印撰墨おつくれる眉のう
心かほをよくくみれをみぐとなけりむかしハ麩類をば蒸たり故お上に引る職人書歌おもしきのう
へのあつ麥といへり貞徳文集お點心ハ饅頭羊肝蕎麥とあり蕎麥切ハさらなり寛永料理集おはへいてい
かきふすくひぬる湯の中へ入さらりと洗ひさていかさお入ふおをかけふたをしてさめぬやうお又水け
のなきやうふして出してよし昔々物語お寛文辰年(四年甲辰)けんこん蕎麥切といふ物出來下り買ひく
ふ賣人おハ喰ものなし是も近年歴々の衆も喰ふ結構なる座敷へ上るとて大名けんこんといふて拵出す輕
口男といふ草子淺草旅籠町の戲弓手も馬手もろべ切屋一杯六文かけねしむしそを切の根本と聲しお呼
一座子となしお諏訪町あたりにて蒸籠むしそを切一膳七文とよひける其繪をみるお棚のうへお大平の椀
おもりて并べたり輕口男ハ真草中の草子またこれハ元祿三年の草子おて其間程おけれと價異なり又寛文
八年のころの物といふ流行物の短歌おハ八文もりのけんこんやとわれお前後おハすさまじふてありし
おや)江戸鹿子お見頼屋堺町市川屋中橋大が町桐屋同提重堀江町若菜屋本町新橋出雲町(世事談おハ瀬
戸物町信濃屋といふ者始めてこれをたくむ其後所ふとやりて堺町市川や堀江町若菜や云々中おも鈴木町
丹波や與作といふ者其名高し)

○慳貪ハ唯俗お覺えたるやさしみなき意おて一椀づ盛たるを食ふ人の心おまかせて勤もせざるゆゑな
り(吳服屋の現金安賣始りて向くれの物みな其定おなれり大かた同時なるべし)其呼聲おも一杯六文かけ
ねなし現金かけねなしといふと其頃のはやりなり外お持運お膳を入る箱おけんこん箱なるをやがけ

んどんとをかりいひ兵箱の蓋の如きをけんどんふたといふ大名けんどんといふ一代男女郎とも食好み
する處なた貝のふくらいりを川口屋の帆かけ舟の重箱一杯と思ひくゝお好まるゝこそおかしけれ(一)
代女川口屋の蒸ををどある其重箱なり)帆かけ舟の諸大名の舟を五色の漆にて繪あかきたるなり(西
國の大名難波おて職して出たつ故の船とも相印を見習へり)大名けんどんの名いこゝお起る今も此器
残れるもの有て好事のもの茶箱も川口屋の箱なり蒔繪の帆かけ舟のみおわらず種々の模様有又一
種の箱あり大ふして四角なり内おへだて有て幅の狭き方お汁つきの箱辛み色入貞草の江戸鹿子提直
とあるのこれらといふ後忍ひけんどんといへりもと此宮ともほうどんをも入たりうどんハ桶みて持
運ひが後にハ件の箱になりたれども猶桶をも用ひしふや俳諧三疋猿これほどの廣う住居お掃のかけど
ちへもつかずうどん一桶温故集來山夕句春雨やもらぬ家おもうどん桶寛政の末迄も箱も盛て賣しか箱ハ
今絶たり)後のうどん箱ハ蓋なく模様なども繪かず(家の印など付たるもあり)そのかみの箱大名け
んどんといへど鹿末々漆繪なり青貝ニギサシなど時たるも有江戸名物鑑大名けんどん新うとや二本道具の汁
辛味又忍けんどん敷入や二階へ二膳えつふ山

○風俗女選雲鈴が蕎麥切頭ふ伊吹蕎麥天下おかくれなければらみ大根又此山を極上とさだむ云々近頃
ハ慳貪屋の手お落て所化察の俄客お青貝の手桶荷ひまみ比丘尼宿の大よせお錫の鉢をすゑならふ蕎麥
大根ハ君臣佐使の付合なるを越路お胡椒の粉の折形を備へ都の方にハ山葵蓋ワサビハカミふてやらるゝまろ本意なけ
れ先師翁の云るとあり蕎麥切俳諧の都の土地お應せずとて一生請合やされずとかや本朝文鑑二竹堂(支
考り作るなるべし)蕎麥切頭おつれ武士の喰物おしてお茶の男ハかくとも得ざらん扱こそせをの
翁も我家の俳諧の都ふうつらぬハそば切の汁のあまふも老るべし(今ハ京難波ハ佳なる蕎麥なし)風

流徒然草京町の三浦お几帳とてやんことなき全盛の女郎有けりそば切を好みて多く喰けり客よりの付と
どけハ小袖の外ハ皆そば切となりけるそのとう汁ハ愚痴なりと江戸汁のみ好む其外人集りしてく
せける程お出る時ハ半分ハすみのつるぐやの拂となりけりまのまねとして今も二三人をばきりすきの女
郎ありけるとぞ云々洞房語圖ハ婿鈍ハ寛文二年寅秋中より吉原お始て出來たる名なり江戸町二丁目お仁
右衛門といふもの温飽をば切を商ひしハ一人前の辨當を拵へそば切を仕込て銀目五匁宛お賣る端傾城の
下直なるおなぞらへけんどんそばと名付しより世間お廣るといへるのうけがたし端女郎を呼しハ蕎麥の
うたより准へたるお女郎のみおわらず都風俗鑑ハ慳貪野郎と云もあり延享二年草子賢女心妝まだらく
女をいふ處集せんだし廿四文のそば切小半酒を小宿のかまじお呑てままひ酔あまかせてうどんやの
けんどん箱を枕おして晝寐これよても其價知べし(一人五匁づハ彼慳貪奈其茶のわたひをまぐへしう
○温飽庭訓首書お貞女云書言字考唐韻と引て餛飩の字を出し其下温飽和俗所用と見えたり和名抄四聲
字苑云餛飩餅判肉麩爨之云々卷懐食錢ハ啓益按救荒野語云以水和麩作皮包菜肉糖蜜等餛飩炊爨熟象混
泥不止之義今俗多用之祀先云々按ずるお混泥後お食偏お書かへたるなり煮て熱湯お漬去て進る故此方お
てハ一名を温飽ともいひしなり今世温飽ハ名の取違へなりとれハ温飽おてあつむぎといふものなりとい
へり鶏卵うどんといふハ麩お砂糖を餛飩お包みたるものなりまれらをおもふ其もと餛飩なりしと老る
名の取ちがへおもわらず物の變じたるなりひかしハ温飽おりならず梅干を添て食たり懐子集うどんもの
おる繪庭のう(一箇)梅干のすいさんながらまじそりて宗因千句梅干くふた真似ハ其儘膳くたり扱もう

どんやこはすらん料理物語うどん胡椒梅とあり昔ハ温飴を専らふして蕎麥ハかたいらなり近時までもそ
ばやとうどん屋と稱へしなり又今ひもかいらうどんと云ハ平うどんなり是ハ東海道名所肥前海のあたりお
伊も川うどんとば切と見え一代男艸子ふ二川と云所云ハ芋川といふ里ふ名物ひらうどんといふとあり然
らバひも皮ハ芋川なるべし

○衣食住記お享保の頃温飴蕎麥切菓子屋へ誂へ船切ふしてとりよせたり其後廻町へうたんやなどいふけ
んとんや出来蕎麥切ゆでハ紅か塗の桶ふ入汁を徳利ふ入て添来る其後享保半頃神田邊よて二八即座け
んとんといふ看板を出す(か)ればるばるもうとん桶ふ入たり二八うばといふと此時始なるべし)

○又云夜鷹をハ切其後手打とば切大平盛賣曆の頃風鈴蕎麥切品ふ出るとあれハ風鈴うばと夜鷹蕎麥とい
殊なりとみゆ思ふふ今も湯菜籠めて夜とば賣ダ有初め夜鷹とばといひしハあのやうの荷ふてありしなる
べし狂詩諺解ハ風鈴とば夜たかとばと似て非なるものなり大平ふもり上おさありといへりこれ上ハ大平
盛とあるも今のまつばくになると知べし(唯大平ふもりしハひかしより然り)銅豚ハ太平樂府温飴蕎麥火
行とあれハ京師もかなじころ夜とば賣出しとみゆ

昔ハ夜の煮賣御法度なり寛文元年辛丑十二月廿三日先日も如相觸ハ町中茶屋煮賣仕ハ者并振賣の煮賣夜
ふ入堅商賣仕間敷ハ云ハ寛文十年庚戌七月日暮六己後より煮賣可爲停止前方相觸ハ今程方々有之沙汰と
も彌可爲無用事

其後夜とば賣もありしと見えて貞享三年寅十一月晦日うとんうば切何よりらず火を持あるき商賣仕ハ義
一切無用可仕ハ

○手打とば予ダ幼きころ母の唄ひて聞おせられし小歌の節今おもハ難波十日夷の賣物の歌ふ擬したる
ものなり唱歌ハ赤いもの盡甘いもの盡色くありうまいものみとりていたうこうわんとばまり西の宮太郎
ダ麥飯上林と同時行ハれたる食ものともなり太郎ハ葛西太郎と稱せられぬ中ごろすたれて武藏屋權三
のみ流けて太郎ハ無なりしダ又近年再興したり其他ハ跡もなし夷宮ハ廿四五年前迄僅お残りたりしダ今
ハ絶たり道光庵ハ江戸鹿子増補(寛延四年)淺草稱往院塔頭道光庵住侶生得蕎麥切を嗜み常ふ食す此故ふ
人間來れハ取敢ずもてなせしダいつとなく世ふ名高く京師丸山の茶屋のごとし歎息すべし明和二年川柳
点道光庵草をなめたい貞心うり次云後ハひりし物語むさしや權三ハ始め麥飯斗を焚て喰せたりとぞ我十
五六の頃なり(寛延年中)麥斗庵の計字を心得すしてむくけいといはすむくとあんと唱へたるもおろし其
後年を追て繁榮し今の姿ふなりてもふら挑灯ハ抱澤瀉の足きま麥斗の字を書たり後これもやめてむさし
や權三ふて通りぬ(或人云太郎ハもと村中の番人ふて堤下お居て鯉魚を賣しダ頼てそれを煮て麥飯ふ添
へてあきなへり江戸ふていふ番太郎まねなり)

あすの味噌 法論みそ 坐禪納豆 濱名納豆 扣納豆 冬瓜きり賣 坐禪豆 煮染豆 寺納豆

金山寺 三峯尖まゆみせん 梅醬 昔のひねりたる料理 醍醐獨括芽 鞍馬木芽漬 淺草海苔昔

と異なり 初茄子 青海茄子 松もとき 蓮花茄子 初鯉 走りといふ事 おんさの初物

著聞集ハ式部大夫敦光朝臣のもとへ奈良なりける僧のあすりみそといふものをもて來りけるふいつのぼ
りたるぞと問けれハ借うくなむさのふ出てけふもて來るあすりみそ(敦光朝臣みかの原をやすきてま
らむ此あすりみそといふものハ法論みそなり下學集ハ法論味噌本朝南都法論時之故曰爾但世俗所言也

職人盡歌合やうろみそどわり秋ふなりて奈良より賣ふ出揃尻ふ法論みそもと南都の製なり興福寺維摩會
十月法論日とわたる講師等小氷のため座を去りぞく事をうしとして黒豆豉を食ふ故に法論みその名あ
りとりやといへり本草も豆豉の血痢などを治すと見えたと小氷を截むること聞えず此功ある事
を去らざりしとみゆ大和名所圖會も小塔院趾の條下法論味噌といふあり護命僧正の製作なり故に人みな
護命みそともいひ又此地飛鳥川の邊なれば又あすりみそともいふ云々嘉多言第五法論みを賣の夕立とい
ふ諺あり物をそこなふとを恐る言や犬子集(四)白きものを黒くなりけといふ句も(慶友)夕立や
法論みを桶に入ぬらむ人倫訓蒙圖彙法論みを黒豆にて製するよし町へ賣出る男柿染のうたひらを上張
み着る事これほろと賣の看板なり曲物も奇麗なることを覆ひさし荷ひ何方にても下に置事なし一方を
高さ所へ持せ置云々有り曲物も薦をおほひたるなど職人盡歌合の繪も書たると同じ遠州濱名の納豆は是
みひとしきものなるべし桂川地蔵記(弘治二年の跋あり)賣買之物少く記之とある内も坐禪納豆法論味噌
と見えたりこの坐禪納豆は濱名納豆の製なるべし後煮染の大豆を坐禪豆といふもこれより出たり坐禪
も小氷の爲めこれを用ひしなりひりし茶食チヤウシキもせしものとみえて醒睡笑ふ見たまよろうまさうなれや
この茶の子名はち糸といふてくれなむら糸といふ納豆の異名なり糸ひくをいふ紅梅千句も薪の能の機
鋪とり(可頼)納豆をさげ重箱も組入て(正章)袖べしお唯手を掛もせぬ(友仙)安部泰邦卿東行話説
(寶曆十年)濱名納豆の見つきも似ぬ味も酒の肴もへえならぬものなり今此邊ふありやと尋ければ本坂
越の路三ヶ村の大福寺より出るものにて此邊ふなしといふ然れ濱名の産もあらず云々かささぎの
としもどかけし橋杭も朽てとまなのなどふりりぞ(濱名納豆)鼠糞の様にてうひの生たるものなり法
論とを白きものといひしも此まふや今秋冬の棄れみそを加へて作るものをほろあへといふ唯ほろ
くとする故なり)

○もろこしお美贈なし然るも杭州の諺も一日吃三十丈木頭とある杭は戸口多く三十萬を大凡として
十家毎に播種一分を減すればこれ三十丈なることを云り播種ハ誓をする故なり
○禪喜集も東坡一日曾爲佛印題眞贊云佛相佛相把茶倒掛只好播誓(頭の丸ければ倒み見てすりまぎあた
どへたりまゝも俗も高野のすりまぎと云も同じたとへなるべし又俚語もすりまぎ坊主などいへり
○たゞ納豆汁の實まで添て賣れるも近ごろのとならず人倫訓蒙圖彙も扣納豆薄ひらく四角も拵へ細
うき菜豆腐を添うるなり直やすく早わざの物九月末二月中賣出ると有れば貞享の頃よりもさありしな
り(納豆江戸も近ごろ迄寒き時節のものあて有し今ハ夏も賣ありけり但し粒納豆なり此ごろハ冬も
扣納豆の稀めて粒納豆を賣れり○物の異なれども卑うえて便利なる物の冬瓜のき、賣なり武野俗談も本
所三つ日密合辻番のものも仁右衛門といへる者西瓜の賣より思ひ付て冬瓜をたも賣ふして一錢づゝふ
裏屋の者も賣たり大みそやりて冬瓜仁右衛門と異名をとりしとなむこれ元文寛保ごろの事なり又或人語
りけるハ淺草瓦町の大和屋某といふ者文魚とくひいて人の知たる放蕩ものありその邊も冬瓜のきり賣來
りければ其荷へるを殘らず買ひていひけるやう此邊ふかゝる物もてくるハ土地の恥なり重ねて賣來バ
其儘ハおうじとて歸したりとういとくおまがまし貧人の居所ハ干菜をゆで、賣り經節を削りて賣
も各々その便を得たり)

○煮えめたる豆を坐禪豆といふも坐禪納豆より出でふるき名なりきのふけふの物詔長老さまへ與六丈

十六
報
刊
代
書
一
量

夫殿のふりたは見まひあせん豆を持ってゆてし有云々犬子集(三)抱て寐ねと袋の下へ引入てといふ句(貞徳)坐禪の僧がくふうしき豆望一千句坐禪の床有かひもなき茶盞もならざる豆のみまうふて後の草子ともいふ坐禪豆といえず今專坐禪豆と稱るひひりしは歸りし也二代女(五)さうなる生貝やき玉子の有なぐらにしめ大豆山椒の皮などさびの色町を見たやうお思われ(六)堀江焼の鉢は飛魚の干物蓋茶碗おにしめ豆絶す調味抄は黒豆丹州笹山よし押て汁煮染などいへり(正月殊さらふれを設て式正のやうなれと昔酒の肴お絶す用ひたる遺風なり又數の子を用るも名詮を取のみふあらず是も常酒の口取お用ひしものなり椀久物器は正月の學びする處揚やの肴お不斷數の子を漬て置事此時の用お立事と笑云々

○今の寺納豆も法論み坐禪納豆の遺製京師大徳寺眞珠菴おて造るを一休納豆と云金山寺みと紀州若山金山寺の名物おて江戸お流行出しは享保年中よりとなひ他州おなし東坡金山贈寶覺長老詩能斗酒博西涼但愛齋厨法鼓香また寄園寄所寄お天下第一者金山寺搗豆と云博物類纂(十二)諸州名産を擧たる内よも江陰縣河豚金山寺鹹豆云といひて皆爲天下第一他處雖効之終不及また乾道庚寅奉事錄(宋周必大)鎮江府金山龍遊寺お至りし處お會飯於方丈白絲糕黑鹹豆粥三者山中之精饌也云今この金山寺みと赤黄おして黒くらす其製異なるべし其方お居家必用なごも出たり又日本歳時記六月條お和州達摩寺の秘方おて載たり江戸名物徑山寺味噌麻の實は音面白し四十雀といふ句おれは種おの物を入しと見ゆ

○長崎歳時記正月四日の條古へより延命寺の僧徒金山寺味噌といふを曲物おつめて檀家へ配る其製唐土の金山寺より傳へたるよし家おれを得て珍味とす

○鬼をそ太平記八幡院宣條落書お唐橋や搦の小路の焼しよと桃井殿お鬼みとをすれ

○三峯尖尺素往來點心の内お三峯尖おあり下學集お三峯膳羹之類也節用集も同く膳と書たり庖丁關書お三峯膳羹ハ五斗土器羹二色杉盛おして出すなり此三色ハ須彌の三峯に表し盛なり四季を一季づゝ殘し過去現在未來おかたどり其時節おより色とるなりと有り思ふおその色ハ北ハ黄お南ハ青お東ハ西紅お染色の山(此歌謠曲の歌お須彌山の歌と有り日本紀通誌お泉式部おと云とも出所定くならず)といふハ須彌山の歌といへりこれを春夏秋冬お配し用たおへハ春の時ならおまれを現在とし冬を過去とし夏を未來とする盛うたお見えたり料理物語おまおみせんといふ汁あり菜も豆腐もいふも細うおきりたるをいふみそ汁おだし加ふといへり是も三峰おならひたる物なるべし味噌の色ハ黄とする此紅とするういづれ三色おかたどりし名お有べけれど(或ハ黄おどり或ハ紅お取るといふ事お有べうらすいづれも此三色お定りたらむハ三峯のものとの義を失へり搦桑果(古代の果子のかたを集たる物なり)の中お和名抄お出たる乳餅を三峯尖おしたるハ大なる誤なり唐山おも須彌山お似たるとわり清人趙翼お儒餐の詩お土鏝煤爐老瓦盆莫因鼎食羨豪門儒餐自有窮奢處白虎青龍一口吞目注お俗以豆腐青菜爲青龍白虎湯

○梅おしは汝南圖史お杵白梅和以紫蘇作梅醬古人用以調羹疑即此也こゝおてさらさお云なり白梅おハまほづけ梅なり

○伊呂三絃お其頃のひねりたる料理をいふお何も入れずお雞頭の粟のはしらうし汁割するおあらし置合たる酒びで是よりハ古代青鷲搗鴨增ぞうしどおく手づまのさいたかるい料理よりへたくろまうまさがよいといへる今うら見れべいとをうし

○口頭 湯河莊司か宿の前おある落書太平記南方蜂起條お官方の鴨頭おなもしゆのかハ都お入て何の

香もせずどあり湯河を袖皮ふとりなしたり猿樂の狂言すゞき庵丁ふもゆのかうとうと云とわりまれ今いふ吸口なり

○庭訓往來に醍醐獨括牙といへるハ樅木の春の芽出し秋冬花ふ似たるをたらぼうといふ味土當歸ふ似たる是なり又鞍馬木芽漬ハ通艸忍冬木天蓼等の春末夏初の新葉なり安齋云出羽國人の談ハ其土俗毎年四月老若男女山野ふ出て木芽を採て煮て食し或ハ鹽漬て煮ふ其木芽といふハあけひの芽なりわけひハ木通なり鞍馬の木芽漬も是なりといふ今も曲物ふ入れて送る細うあさみで鹽氣ありと云ふ

○淺草海苔増補江戸鹿子ハ淺草海苔といふハ元來品川大森の海邊よて取たる海苔を淺草ふと製し尊貴の侈膳ふも奉る故殊更ふ其根元の家を吟味して調ふべき事なり當時其の處海苔や餘多有といへども此四郎左衛門(雷神門前うへ木や四郎左衛門)を根元とす此者當所昔より住してそのうみ觀音出現のまきまわかざと結て安置せし十人の牧童等ダ未裔といひ傳ふ云々按るハ紫菜諸國ありといへども淺艸のりを第一とすまれのうみハ淺艸川ふて製したる物故ハ淺草のりとは呼たるなりむしハ今と色も異なりとみゆ寛永料理集甘苔ひや汁ふよりさうな淺草のり右同前色ありしと有東海道名所記ハ品川苔とて名物なり色赤く形とさりのりのちいさきものなり色赤きものハ葛西のりなり今東葛西舟堀二の江今井桑川長島等の處ふありその色うす紅粉の如く白き磁器ふ入るハ紅色器ふつく昔ハ淺草川ふもいでましなるべし懐子集けふ縁日と參る淺草(玖也)調菜も精進ものハ海苔の道古今夷曲集淺草海苔ふ歌そへてえさせたる返事(信海)武藏なる淺草のりハ名のみなりハ心ざしの深川のもの(信海)ハ八幡寶藏坊なり書を松花堂ふ學べり)深川浦をいひしなるべし焦岸琴ふ(元祿十四年版)淺草の産物をいひて行水や何ふとゞまる海苔の味(其角)雨雲や寶ふ于海苔の片明り(文士)五元集ハ角田川ふて海苔すゞ水の名ふすめ都鳥その頃も淺草ふて專製造せし也万治の頃命ありてとらせらる(其後家居たちこみ海苔など漉べき地もなく海苔も遠く大森邊ふて採ることとなりしハいつ頃あう)事跡合考今ハ唯品川浦の磯ハ棄付の竹を立て海苔をとるといへり魚獵の爲の物なりともそのうみも是ふ付たる海苔を取しなるべし色の赤色ハ殊なれども同く紫菜なり今大森村の土人の話を聞しハの柴を残りす新たふ替なバ千金をも費用すべしといへり然らバそのうみ漁ふ用ひしハの廣大なる事なるべし今の黒き海苔ハ後ふ出來しものう今浮田のりといふハ同じ物ながら味勝れり)浮田中割ふて造る此邊大卷とて舟ハ卷車をえりけ大なる籠ふてあさり蛤をとるまこれらの漁人かきなどお生たる海苔を採て製る常の淺草のりより厚く大ふすきたり味まされり)

○江戸よて初ものハ尤賞せらるハハ鰹なり類柑子初字に一朝と争ひ夜字ハ百金を輕んじてまたねぬ人の橋のうへふたゝすみあうすまゝハ一片の風帆をのぞんで早走りを待て公門ハ入時鬼の首とる必ちしけり云々鎌倉ハ生て出けむとつ鰹(芭蕉)漢土ハて河豚の出る時と後日とハ其直いたく殊なると云とを石林詩話など引て江戸の初かつをと同じといへり爾雅翼ハ河豚のとを云て其出有時率以冬至後來每三頭相從号爲一部諺云得一部典一袴言烹和所用多也といへるハげふも江戸のとつかつをふ似たり

○そのものを走るといふ古事記傳(十六)速賢の註ハ今世ハ初物を走といふも速き意なりといへり走るといふとハ別ハ一義あり又走るといふ詞今世の言ふもあらず尺素往來も朝日並深瀬之走摘云々あり舊本今昔物語(廿九)の(廿七)詔主殿頭源章家と云もの正月十八日云々左右の手ハ六つの菟の子を一度ふ取て

取合せて母の幼き子をせしりすやう我子々々と云て年の始の走り者を生を不食ひの忌々まきとなり
と云まゝ其平なる石六つの菟の子を一度打云あり古くより年の始走り物を食ふ習ひありし事
と聞ゆ師門物語ふとしり物取ての峯をぐる鹿澤をひたる兎天をとふ翹あ至る迄云々これハ唯走り物
を擧たるにて新らしき物をいふ處ありあらず年の始走り物を用ひし習ひ故後ハ何れも新らしき出
来る物走りといふとどなれり（今も年始菟の料理を祝儀として用る習ひありとの古さつたへみや）今
おんざのつものといふハ終りつものといふと同言と聞えたり似せ物語おんつめといふ言あり押語
の義かおんざハ是ハ終の座の意ふや又類聚雜要ハ大臣大饗の處穩座ハ座席の名なり爲關白殿御座云々
穩座肴物樣器土高杯繪折敷などあれど是ハありあらず

○これとおもへば西雀夕榮花咄ハ江戸中の松だけの出せめといひしもさまつだけありあぬなるべし初
ものを賞すると昔も今もかえる事なし唯賞するものとさまなき物と有り茄子ハ昔ハめでたる物なり懷子
集庄屋さへやく田樂を食うねと云句（意翔）初茄子とて守護おとらるゝ寛永發句帳（幸和）初なりや
先是式のさげ物（此句瓜茄子の句中あり其頃賄賂を是式と云り）永代藏（貞享五年）東寺邊りの里人茄
子の初生を目籠ふ入て賣來るを七十五日の齡これ樂みの一つハ二文二つの三文ハ直段を定めと云りこれ
其頃初茄子の價なり五元集さみだれや酒句てくさる初茄子賣永ころの吟なるべしそのうみ駿河より五月
出すと初茄子とす今ハ年の寒暖ハ拘らず三月ハ砂村より出るなり初茄子の實觀（ま）のみも非老東京夢
華錄大内の條下ハ其歲時果蔬新上市并茄類之類新出每對可直三五十千諸問分爭以貴價取之また秋茄
子わさゝのかすふつけまててよめありくれと架あわくともといへる古諺あり望一後長千句のこれもハ
や末なりの秋茄子ふくまれたる娶がまうどめ大幣ふなれハなすひせどのやのなすひならねばよめの
名のたつハ洛陽集ハ切形や青海水ハ茄子浮（元好）摺鯨茄子の涙（寄）けり（友吉）今まつもときといふや
うお切たるなるべし松もときとは松茸ハ似せて切さるなり又丸ながら堅ふさりゆを多く付る茶筌茄子と
云ふ所見なけれど近頃の名あり有べうらず又堅ふ二つとわりてきりゆ付たるハ蓮の花ひらに似たりま
を蓮花茄子といへり矢の根鍛冶後集和尙への馳走養物もれんげ茄子（篋）絨輪伊勢講ハ料理も思蓮花茄子
といふ付句あり

さくみ 唐なす さつま芋 筍 食卓

五雜俎云司馬温公有晚食菊羹詩采擷授厨人烹論謂甘酸母令薑桂多失彼眞味完古今登菊者多生咀之或以點
茶耳未聞有爲羹者亦不知公所羹者花耶葉耶といへりこゝあて作るさくみの類
○かぢちやの小なるを唐茄子と名付てやり出しハ明和七八年の頃なり唐なすさつま芋の類ハ初ものどて
賞する人もなし此二種享保のころ迄ハ江戸ハなさものなり元文のころより近國にて作り出す薩摩芋ハ
青木教書（功）あて次第ハ行える世ハ此人を薩摩芋先生と稱す今ハ大ハ民間の助となりて燒芋賣る處何れ
の町も二三ヶ所あらぬ處もなし江戸名物鑑唐茄子、初夢や一ふじ二たか十なすび、薩摩芋後の月みよ七
またのくだり芋これ專行ハるゝの始なり
○荀乾ハ本草ハ酸筍といへり天目筍と名けて舶來あり筍の皮を剝切らずして煮て乾したる故ハし平めた
るが如し戴恩記ハ京ハ珍禁制（て）筍なきよやいさや寺へ參らむ云々紹巴ハ貞徳を誘ひたるなり洛の中外
の堺目を正し竹を植られし頃あり今盛りふもてとやす孟宗竹ハ八國通志ハ載る江南竹一名雪竹（て）元疏

記ふはやのつまのいすしとあるは是なるべしほやハ石勒卒と云ものめていつくあもあれと能登めて多くとり食料とす

○日本鹿子大和國名物の内釣瓶鮓ハ鮓なり曲物ハ入れ膳めて手をする故にいふ大和名所圖會つるへ鮓吉野川のあゆを下市村めて鮓ハ製す其魚を盛る器つるべの形似たり故に名づく其味美にして官ニ獻る年魚ハ吉野諸邑より出す

○攝津名物の内雀鮓江ふな也腹ハ飯を多く入たる雀のごとくふくるればかくいふなりといへり江ふなとハ江戸ふておやまといふいなの子なり後撰夷曲集ちよこ〜とおどれとへらぬ我腹ハ飯の過たる雀鮓かも山井はねのとへた飯に漬てや雀すし(意期)めしのまほきをはねのとへたと云もふるし五元集五月十日雷雨永代島の茶店おやとりして明石より神鳴晴て鮓の蓋(貞享頃の吟なるべし此句源氏明石卷雷雨の事をおもひていへり鮓の蓋ハひかし傘の紙を用たり)思ふ今諺ハ神なりならね放つまじなどいふ此句これなるべし鮓ハなるべしめでハ容易ハ蓋を開かざるもの故かみなりふよつて蓋を開くと作れるなるべし

○江戸鹿子(貞享四年)鮓并食すし舟町横町近江屋同所駿河屋とあり只鮓と有ハ數日漬たるをいふ増補江戸鹿子深川鮓(深川富吉町柏屋)彦膳箱鮓(本石町二丁目伊勢や八兵衛交鮓切漬早漬其外望次第云々)是ふても食物賣し處少きを知らる温故集地帯箱木の下間を宿とせ(蓮谷)鮓や今宵の蓋とどらまし(貞佐)後ハひかし物語おまん鮓も賣曆のころよりと覺ゆ京橋中橋おまんぐへふといふ言より居所の地ふよりておまん鮓といふなるべし此頃までハ當座鮓と賣とハ希なり鮓賣といふハ丸き桶のうすきよ古き傘の紙を蓋ふして幾つも重ねて鮓のすし鯛のすしとて賣あるさしハ數日漬こみたる古鮓なりといへり(寛延ころの繪由國橋廣小路ハ鮓賣の出たる處を書しお今の涼み臺めくものを置き其上ハ賣人居鮓箱と旁ハあん燈あり)衣食住の記芝の神明祭禮ハ醴鮓の名物めて右祭禮の外ハ常ハ鮓ハ酒の店賣ハなかりしハ芝邊めて醴を賣ししハ鮓を賣出し近年おまんすしわけて夜のふしハ鮓醴ハ三國一の名物ハなる(此説おぼつかなし神明祭よりての事と聞ゆ江戸鹿子等ハ其邊の鮓屋みえす)

○文化のえしめ頃深川六軒ばりよ松がすし出て世上市の風一變しうれより少し前ハ日本橋まこのやたいみせめて吉兵衛と云ものよさてんふらま出してより他所もよさあげものあまたふなり是また一變なり

○享保十八年刻樂燒秘靈の附録ハ茶寮料理十五條あり第一條ハ花栗を作る法有り大栗の荒皮を剥き白砂糖湯に漬一夜よく熟し置ハ栗軟かくなる花を作らんと欲せば四角ふきどりて角をうきかけそれよりむき廻せば花出来るなり五葉おなりとも六葉おなりとも好みよよりてさまんハ作意出来るなりといへり是等大根などめて花を造るきりかたなり今ハこれらの法をの外おさまんハ鶏卵を殻どもに切腹を介どもに截やうの事迄も書えるしてハの集る街にて鬻く者蘿蔔胡蘿蔔をさまんハみきりて見すれハめづらしからず續五元集さまんハお割めてみよき栗生姜投入する四五文ハ花とみえたれハ寶永以前よりもこの切かたありしなり又六玉川二篇名月夜老荷の鶴も生のこり又めうがの鶴のくさる舟底といふ句も有寶曆五年白花鳥といふ草子よけしきざり水肴の鉢ハ留る身ハめうがの如く頭ハどうがらしの如しいかの甲お生するハ稗の中ハ留る子どもの慰ふなる鳥なり(鳥賊の甲ハ小兒のする事故今も有めうがの鳥などハ用

るものなし

○瑯環記致遠閣雜組を引て七夕徐婕妤、雕鏤菱藕作奇花異鳥、撥于水晶盤中以進上極其精巧、上大稱賞、賜以珍寶無數、上對之竟日、喜不可言、至定昏時、上自散置宮中几上、令宮人暗中摸取、以多寡精粗為勝負、謂之闘巧、以為勸笑、また東京夢華錄以瓜雕刻成花樣、謂之花瓜、又以油麪糖蜜造為笑語兒謂之果食、花樣奇巧白端如榕香方勝之類、若買一斤、數內有一對被介冑者、如門神之像、蓋自來風流不知其從、謂之果食將軍、(果食將軍のとい錦袋圓の中の佛像又大黒煎餅の中より出る大黒と似たり)

○大黒煎餅はじめ多くの内、大黒の木あて小く刻みたるグ一つせんべいお包でありこれ又取わたらんとて多くせんべいを碎く故小敷を賣むとて去出せしお後おのさまの物を作りてせんべいお包みて御賣するもの持よりきて辻のすみせにたるして賣るこれの中物なきいなければども只中おあるもの、知れざるゆゑ小兒またこれを求む

○又西瓜を輪ちがひなどお切るとあり諸艶大鑑嘉祥喰する處に西瓜を香の圖お切らし云々あり又番南瓜を木魚お作るとあり天明ころよりといへり定ならず西瓜の灯籠俳諧三正猿附録暮るども盆の節季八月ありて西瓜おとぼす橋の行燈これへたら賣の赤き紙の行燈なるべし西瓜の肉をぬり取て中お火を點す事なり近きとどみゆ火光青くみゆるものなり廣東新語お似たるとあり廣州時序の條八月十五之夕、兒童燃番燈持袖火踏歌於道、曰灑樂仔灑樂、兒無昨塵、塔累碎瓦、為象花塔者、其塔多、象光塔者其燈少、袖火者、以紅袖皮彫鏤人物花草中置一琉璃盞、朱光四射、與素馨茉莉燈交映、蓋素馨茉莉燈以香藤袖燈以色勝

○西瓜ハ大和本草ハ義堂空花集和西瓜詩あり西瓜今見生東海割破猶含玉露濃今按此種寛永中初自異邦來義堂ハ後小松院時人此時西瓜未可有不知以何物稱之平若ハ古ありて其種亡て近年又來れるやいぶかし云々京都ハ寛文延寶の間お初て西瓜の種を植といへり類柑子西瓜ハ卅年來のはやりものおして今ハ和歌所へもめしおげらるべかりしを女房種かきらせらるゝ方もあるにや去來抄に猪の鼻くすつかす西瓜かな(卯七)正秀云猪なればこそ鼻へくすつかしけん去來云させるとなし此頃ハいまだ上方ハ西瓜珍し正秀も珍しと思より猪の怪まみたるとい風聞出せけり西國生れふて西瓜も瓜蒴子の如し曾て必ゆかす惣して人の句を聞お我知る場えらざる場違ふひ有べしと有り西國より漸々京お上りしなり娘容儀お奢り者のとを云て奥様の浮用とて西瓜の代三百六十五笈新小判おて八百屋ガ請取て云々あり大お行ハれたる也○真桑瓜ハ濃州真桑村の種を京師東寺邊に栽し故夫を真桑瓜といひしが今ハ一般おまか呼なり一種皮の白めなるあり増補江戸鹿子本所瓜味美ならず本田瓜といふ形甚大なり云々いへり是はんでん瓜なり今これを銀まくいといふ金まくいお對しての名なり寛永發句帳お後藤判とあるべき金まくい哉(貞徳)懐子集大和人こんと賣なり白まくい(方好)續山井類ひなき佳味の梵天の真瓜かな(沙長)今も肉多く肥たるをホナタルと云是なりおもふ本田瓜ハ梵天瓜なるを本田と書ほんだと誤れるなり醒睡笑和州より出るはてんど云瓜ハ延曆寺慈覺大師天長十年四十月て身つかれ眼くらし命久しかるまじと思ひ叡山の北谷ハ草庵をひすび三年つとめ行ひておわりをまたれければある夜夢ハ天人來りたりこれ靈藥なりとておどふ其形瓜お似たり半片を食す其味蜜の如し人ありて告るやうこれ梵天王の妙藥なりと夢さめて口中餘味ありしがして後やせたるかたち更おすくやかあくらさまなじりますす、明らかなりその半片を土よまさきければ全き瓜の生せしいまの梵天これなり元亨釋書お見えたり(これ附會の説なり釋書ハ有一人告曰是切利

婦遊笑覽卷十七

天妙藥也云々羸形更健昏眸益明於是石墨草筆書妙法華云々以下彼の半片の瓜の事なしそのうへ切
利天と梵天との異なりはでん瓜の名よりてかゝることを云へたるなり一瓜を六かへ半ふむくといふも
久き事にや五元集あたまから章魚ふなりける六皮半

○こゝのいせの事ながら汝南圃史蘇州志を引て云好事者以枝頭向陽未熟時剪紙爲花鳥貼其上待紅熟乃去
紙則花紋燦燦入盤釘可愛

○昔の酒宴獻酬今世のさまでふとたがひたり先我のみて扱酒づき酒をひとつうけて其酒盃を持て對
の人の前ふ置てまいらすこの時歌詩或い今様朗詠などうたひものを看みせしなりさきながら京都將軍の
時もはや今の世のさまでみえたりといへり漢土の酒もりの如し雲谷臥餘予數歲時見郷人旅飲間有止用

一盃巡輪者而官府禮讓則各一盃十餘歲後并鄉曲亦無一盃巡飲者矣觀新唐書載張說事則知唐時雖官燕亦止
一盃而唐書官之未白不如唐世說爲詳世說曰張說拜集賢學士於院廳燕會舉盃說推讓不肯先飲謂諸學士曰學
士之禮道義相高不以官班爲前後說聞高宗朝修史學士有十八人時長孫太尉以元舅之尊不肯先飲其中九品
官者亦不許在後乃取十九杯一時舉飲長安中說既修三教珠英當時學士亦高卑懸隔至於行立前後不以品秩爲
限也遂命數杯一時同飲時讚深賞之これ准ふべくもわらねど今里巷の習ひふ口論鬪争の和職酒もりす
るお必双方酒づきを取て一時に飲み其杯をとりうへて獻酬する事なり又伊勢家禮式云まひり酌と云との
我飲て則我酌をするをいふなりたかかゝるくするをいふべからずと有り御傘お盃ををしむるを鬼の
みといふ事あり云々といへる是今もあるじよ初るなり酒をのむお種々の名ありれもひさし思ひとり横
せり思ふへしなりのみ付さしなを猶くさくあり(松屋子擁書漫筆)多くいへれば略きていふ(其中ふ中
のみといふ)今川大双紙なぞも出て今俗よあひをするといふ是なりすけると云と必得るの非なるべし
驚のみ(宗五大双紙)上)兩人出て十杯とくのみたるを勝と申しといへりこれあて其名義解しがたし接
る今川大双紙(下)梅の花の杯とのむやう左のかたよりのみとじり下を中なる盃あてその蓋を本の所
お置て皆順あのみべしさて後の中なるを飲なま三つ星も左より呑なまといへり是ハ盃お酒をつぎて丸く
五つ中一つ居置^ヌばうの形梅花お似たり三つ星もおなじ形ふよりいふなり今も田舎より一とひろのみ
なといふとある即ちの遺風なりさて驚のみ(梅お驚といふ縁よていふなるべし驚のみのか)ハ盃五ツづ
ハ二つ並ふると思へる懐子(八)呼客人をあかねもてなし盃の驚のみも興ありて貞順故實集中呑大中呑
の事かやふの儀者於殿中無御座以下みて中呑をせられい云々取違の事先貴人より早くまいらせし
事勿論なり云々二星三星之時ハ不用い蓮呑の事蓮など見物おまかりて於其處の事おい云々飲人ハ如常ハ
不飲い顔をさげて蓮葉の中へ入いて飲い土器のやうお呑い事ハなりいはず云々おひよしと申事先一つう
けてそと飲て扱獻數を合せ七其上を呑又一つのみ申いへん獻の數三つみて酒をバ二つ呑なりと見えたり
又瀧のみハト養在歌瀧のみハ絶て久しく酔ぬるおよたれなぐれて猶ねむりける古今夷曲集うたひまふ袖
ハかへさもあら波のうてる鼓の瀧呑の酒

○卯酒大鏡お兼通公のこを云て後夜ふめすばうそのゆさかな云々ばうす卯酒なりされ夜中のむにハあ
ちす卯時ふ飲を云朗詠の注よあり唐人の詩み往々見ゆ

○硯水閑田耕筆お今世造作せる職人ハ三時の食物の外ハ勞を感むる爲お酒餅類をあどうるをけんずると
云橘洲ハ閑食かといへりとあり

廿三
自刊
書

○酒の飲くらへ昔しよりあれど慶安のころ地黃坊樽次が大師河原の底深と酒戦の事水鳥記みえるして世
不聞えたり底深樽次は作名なり水鳥記に大師河原池上太郎左衛門底深とあり洞房歸園に縣升見といふ
醫師大師河原甚哲と酒戦の事をいへりその酒戦の杯は蜂と龍とを蒔給みしたる大杯なりさすのひとといふ
謎なり七部集(沾圃)大師河原に遊ひて樽次といふもの、孫小逢ひてそのつるや西瓜上戸の花の種

○杯は種々あり猿源氏冊子にまさきゑのこんふうろぎのさかづきすえてとみゆ富士人穴冊子にたけなる
かんざしにせいたいがたていふかろうろぎのすみをすりながしたるがごとくなり是を友人松屋が考ふせ
いたいのまゆすみの誤みや小敦盛の冊子もせいたいのまゆをみたんく口の口ひるなをみゆこほろぎの
杯は黒ぬりの蓋をいふこほろぎといふひしも其色黒ければよしわりといへり大い誤れり本書にわかろう
ぎとあるをこほろぎと引直したり説の付ざる故なるべし(宇田のさいきの草子ひすいのかんざしにせい
たいがたていたふからすみをかけたるふことならず師門物語にひすいのかんざしにたていたふからすみ
をすりながせるが如くなり恨之助冊子雪のうすやうわかろうろぎのすみすりながしなどあまた見ゆ)寫本
あて外ふ偽も無らんふにさる事もあるべし是等みな板本あて俗書あれば誤もあるべけれど諸本みなか
うろぎとあるをやかんざしは髪のをいふなり源氏なども見えたり臂黛の立板あてまれの辨を待す
して明らかかりさてかうろぎといふ香爐木なるべし伽羅をいふなり奇南をもて造れる杯なりかうろぎの墨
の唐墨の香べしとといふ

○黒ぬりの蓋むかしの物みあれと猶古あはらず西宮記十月朔日旬條下延喜十六年四月廿八日宣旨無侍
從者爲出居此日親王四人參上太子以朱器爲飲具無蓋これ朱染の杯なりかく記せるも杯は常々土器を用る
故なり(黒器いやしきよし古事談も見ゆ器用部いへり)盃尻或人問古へ我國の盃如何答云上古盃は土
器のみ漆ぬりの中世以來り相州鎌倉教恩寺(時宗なり)あ昔平重衡千壽前と酒宴せし盃とて寺寶あり大さ
今の平ざらの如くあして淺く薄し内外黒あして梅花まさはる是中古酒杯なり古田織部介重能の茶亭の嬰あ
備る時製し初し盃の形なり近世ハ彌輕薄の器となれり谷川氏云とうさん北山抄ふ螺盃蓋と見えたり是
ふや湯蓋とも書り又とさんともいへり今いふものハ古田織部助製し初た同大杯の形也といへり貞徳獨吟
百韵折を出せりし此菊のやと見るもだい大盃へくるしきふ自注あ當世をりへ盃とてあり近來のとながら
天下通用ふしていふより取用ゆ是俳諧の總なり去ながら近き事ハ大かたせぬ事なり能分別すべし(猶多
くあれども畧之)

○をくら屠龍工隨筆小原女どもの笠かふりて歩みつれたるを義政の東山より見給ひて小原盃の作り初ら
れしといへり此説非なり大原女を小原女といひか、笠かふりての薪をいたしさがたし(但し小原の女と
いふみやそハ小原女といへるとなし)凡うさといふハ笠のみあらず物覆ふをいふ名なり合子あうさど
いふもあはふ物なればなり(筆などといハ翰とも是もかさといふかた然るべし)くらといハ杯の異名なるべし
事物異名酒盃の條に巨羅(巨香坡上聲)と出たりさりながら常の杯とハ異なり照世盃首卷第一回阮江蘭接
酒在手見那巨羅是尖底巨腮小口足々容得二斤多許是ハ中ふくらなる下細き杯なり群碎録不落酒器名白樂
天詞銀不落從君勸とあれ不落巨羅一音なり袁中郎が觴政十三杯杓の内ふ黃白金巨羅と有また帝京景物
畧城隍廟市のうり物の内有倭扇有葛巴刺碗數珠云々また西域双林寺條下ふ葛巴刺碗者解項顛骨而金絡瓣
稜尖如蓮房也これこ、あていふ佛器猪口なるべしされハ巨羅ハ異國の碗の名ふて今こつふといふものと

見たりこゝみて五山の僧なと酒杯を巨羅といひしより小盞をおいらといふ事ふなりしなるべし

○茅柴萬原詩話俗お村店の薄酒を鬼ころしと云即村店壓茅柴と云是なり又茅柴酒と云べし韓子蒼詩あり飲慣茅柴苦硬不知如蜜有香醪下學集荊柴濁醪也一醉而即醒如燒荊柴火便滅とあり宋人錦綉萬花谷前集韓子蒼詩云謂苦硬之酒如茅柴火易過とあり按とるふ壓茅柴とハこの酒の茅柴の火よりもまされる意壓倒するを云なるべし

○可杯醒睡笑人のぞちといふ條べく杯を戯れお夏菊と名付けてころしへ其ゆゑハ之もふ置れねばなり榮花咄大坂の女郎越後可盃云々雅筵醉狂集ふ盃の底お細き穴をあけて指を以てその穴をふさぎて酒をもらしむ仍て飲盡さねば下ふ置れぬなり可字ハ文章の上お有て下お置さる字ゆゑ俗お可杯と名付用ゆ

○古へハ杯の大きをいふふ幾度入といへり五と土器といふも五度入の土器なり犬筑波集お大杯を好む山ふしかつらさや峯お五度入七度入また大杯をひさし野といふ鷹筑波集むさしのを見て肝つふすなり下戸の前へ大盃や出すらん節用集大盃酒盃大者曰武藏野野見不盡之意也と云り吾吟我集盃の名ふなかれたるむさしのお富士をたくへて蓬萊の臺後撰夷曲集むさしのけふはな出しろ長酒お入もこまれり我もこまれりむさしの酒お入るへさやうもなし下戸より出て下戸の客人

○元祿會我物語友禪繪お白うるしの玉子盃世帯形氣盃ハ國春といへる女筆のまき繪十うへりの松お鶴龜をうへせ誰袖海おむさし野おかくゆき淺し笠さうつきハかさびくなりとうく熊がへこれをみれば武さし野お大なれ共淺さをいへりくまがへといへるハ編笠おあり其形の杯とみゆハ落葉色もやうお付るを吹よせといふ後京極殿木のおとふつる木葉をうきつめて露わたしむる秋の盃といふ歌より吹よせといふ盃ありとか

○昔我物語おくのハ狩の酒もりの處いとふの次郎がひと云貝をとり出し此貝ハ日はんお一をんのかひとて院へ参らせたりしを公家おかひを修用ひなきとなればおけ下さるハ太郎貝をばちハお下さるひさげ五つぞ入ける二郎貝を三郎お下さるをんをけ玉につておひの次郎おどらするてんじやうをゆるされたるうつりものとしてひさうしてもちけるをかりふしかわづの三郎といかひこになりてきたりしをひきでものおえたりけり内をべおのれなりおしてそとハ梨子地お蒔ていそなりよめをさしたりひさげ三つぞ入けるこれをとり出したさくちがもどよりおせめて二どづハぞまハしける五元集沙干なりたつねて參れ次郎貝同集お太郎次郎の貝をとりてかけ出の貝ももてなす新酒故ともあれハ注螺の貝の杯おて次郎太郎ハ大小ふよりて呼なり(但し貝いおまやこ其外何ふても杯お作れるう)

○類柑子みやこ鳥の序僧專吟なるおわたりのおつせおひをうかひせと名づけて奇勳とせしハ身を捨てこそのおれとより出て遠き境もおる人すくなからず俳諧家諸酒瀨や器量くらへと菊の酒(練石)竹丈点前句付やすいとなりハ浮せお五杯つ々けて沙干瀨隨筆春來お貝の銘いでその頃ハ寶曆五年三月十八日折からや沙干瀨お浮瀨の貝太郎といふものをみるもとより我ハ江戸のこへぬきおしてみぬ西國のよしあしハおらす何おもせよたふハと引うけたる社心ちおけれ云をされハ一斗詩百篇李白お面おかふりけりといふ晋子お醉吟それハ瓢これハ又難波めハよろおう老お足もどをお松よたすけられて捲簾の花のかげお月と共おふしぬ丹鉛録云車渠杯注酒瀨過一分不溢貝さかづきハこの故なるべし

○箋紙繪實方おらぬ雀さかづき鶴をいふなるべし

○下り酒昔ハ江戸まで多く酒を造りて下り酒ハなかりし事跡合考ハ南川歸て云津の國鴻池の酒屋勝屋三郎右衛門と云もの酒二斗づハ入る桶二つを一荷として其上ハ草鞋敷足置きたるを擔て江戸下り大名の家へ至りて一升を銀二百文づハに賣たり其頃ハまだ鹿酒のみよこれハ酒の如き美酒なき故はいとちがちに買ハやらかし頻り上下して夥しく利を得たり其頃ハ米ハ下直なり木錢ハ十二文ほど乏たる故鴻池より一上下錢三百五六文あて仕廻たり肩の上ハかりあてはかゆかざる故その一荷四斗の酒を一樽として二樽を馬一駄として數十駄づハ持下りて勝屋賣たり依之末代に至りて酒の價を極るとき十駄金子何十兩と立るもの廿樽酒八石の積りなり退日酒られる故馬の脊ふても及びがたく終ハ東海を何十万樽と云に至りて船おつみ入津する事今日盛りなりと云り此いつ頃のことより江戸鹿子下り酒や中橋廣小路吳服町一丁目二丁目せと物町一丁目と見へたり

○酒の今の如く清酒ふなりしハ一百年以來の事となん今も邊地ハ濁酒を用唐山なども濁酒多しと聞ゆ酒の詩などハ浮白といへるも此故天香樓偶得古人酒以紅爲惡白爲美蓋酒紅則濁白則清故謂酒爲紅友而玉髓玉液瓊飴瓊漿等名皆言白也梁武帝詩云金杯盛白酒正言白酒之美近來造酒家以白麴爲麴并春白秫和潔白之冰爲酒久釀而成極其珍重謂之三白酒於是呼數宿而成之濁醪曰白酒使詩詞家不敢用白酒字失其旨矣この白酒といへるも猶ふこり酒なるべし建仁寺の河清酒樽に書る詩見時如白水飲則勝丹砂八十老翁面春風二月花などいへりこれ依て思ふも古も連歌俳諧酒を飲とを霞を汲といへるもかすみと濁れるをいふなり又唐人酒を聖賢ふたとへて呼聖と稱するハすみ酒なり寒山詩滿卷才子詩盜聖人酒なども云へり

○日蓮上人録内録外等ハ聖人一箇とあるハたい酒と云へり

○寛文九年己酉正月十四日帳ハづれの酒屋來月朔日より改の者遣ハし少し成共所持して酒道具共ハ取上其身曲事ハ可申付ハ勿論請酒も帳ハづれの者共ハ向後商賈可爲無用云々○天和元年辛酉十一月此度燒燬印申請ハ桶數ハ造り込可申なり石高書上可申ハ決定の外一切酒爲造申間敷ハ寛文八申九月當春改被成ハ通町中酒屋共酒造り申石高半分の酒桶來る廿日より燒印被仰付云々

○酒の肴ハ種々雜伎のさるかう古より有り酒飯論ハ管絃亂舞白拍子立舞居舞舞舞今様古柳をとりとぎ神樂催馬樂其駒と猿樂物まね色々ハ聲見さ言わさ力足さつくさぬことなかりけれハ聲わさハ聲をつかふなり若聞ハ福大神といふ狐人あつきて朗詠さいばらなどの聲わさとも有り聲色なども是なり天狗鬮鑿鑿定縁起序ハ先生笑云我飯を喰ふて人の聲色をつかふも皆人々の物すき也云々(傳家寶三集ハ本儀科(身ぶり聲いろなり)聲聲科即急口令(いひひくさ)とを口とくといふ早言なり)鼓嘴科開口科(ものまね)轉運科(順みいひ又倒みいふなり)數絡科(やま賣のまねを云り鼓も打されバ鳴すもの言ハされバ分らず人過る處ハ名をどいめんとす我ハ天下の名醫なり云々などやうの事長けれバ略す)酒酒令ハさまハあり般子をふりて酒を飲こと有り景象如意また花紅柳綠また清風明月何なりとも其時の思ひ付ハ定めてするハや喩へば清風明月ハ六を風云を月と定め般六つを用てふり云と六とを出さんとす出されバ酒を飲て般と盆とを送るなり(景象如意などハ晴和日なり日を云ハ定め般一つを用ひ云をふり得されバ酒を飲盆を送ると同し童のするびんころがしといふと似たり)

○早こと本朝文鑑支考ハ万歳行今の京ハ平かハ菊桐々々三菊きり自注ハ菊桐ハ當時の傍紋なるを市の童の早言ハ倣ひて重ねいへるなりといへり伽羅女(五)年中遊ハ給ムク役めなればのら如來身のら如來と

そつても云々歌舞伎にて外郎うりのせりふ又芝全交々戯草子ふ鼻下長物語といふ早ことの本あり
○物まねの身ぶりなりをいふ物語は歌舞伎の事といふ處在郷の百姓酒に酔あらしゆる物まね云々有り歌舞
狂言を物まね盡しといふを又まねるを身ぶり聲色などいへり輕口咄臆病夜行して芝居役者の聲色つか
ふを聞て怖れたる處お氣づりひなされますな今の役者の物まねじや昔よりあれども聞えたるもなきお
や近世風來が放屁論雀市が聲色の其人をまふあるが如し云々安永をろ漸地中洲あきわひで雀市といふ小
屋もの身ぶり聲色よく歌舞妓者の眞をうつしたり(安永八年をかりふや柿色の素袍を着て堺町より咎め
られたりとまじ)俳諧時津風庵から出たる盜人の恥丹胡粉鼓賣樂屋のすき通り女の聲の細長う立といへ
る付合有これ明和の初めの作なり

○さかな舞醒睡笑病愈たる祝の酒もり半の盞の物の鶴を取あげて鶴の舞を見とやなど拍しよきふりお舞
おさめしを見て一腑ぬけたる人床お立たる矢をとりてやまひをまばやととやしたる話あり夷曲集さかな
舞の扇の風もいやでい今をさかりの花見酒おハト養狂歌集人みな酒のみて興の餘りみや鏡どぎといふの
やしとをしてみひける酒のみてまふつうたひつはめいせかみといふを見さいなの月(今さかん舞
どりて壁ぬるまねを田舎人のとやしこまふすると有)とやし物といふと猿樂狂言も見えて古きふりな
さかん舞羅漢舞みなおなじ類なり又みさいないふをやしと古き小歌おあのみさいまの山みさい戴
まつれたおえら木を了悉が狂歌咄お大原木曜といふ曲あり戴の家的大事なりとて猿樂どもの秘するとい
ふも黒木を賣となりとあり件の小歌の大原木曜の唱歌なるべし大弊などお出たり羅漢のまねなせの其次
いと云とみな順の舞の餘風なり松月堂不角が矢の根鍛冶後集あよき作意とて譽られふけり釋迦の堂建る
木やりの羅漢舞(順舞ハ歌舞の條にいへり)

○掛戦委巷叢談杭州隱語をいふ條今三百六十行各有市語不相通用倉猝聆之竟不知爲何等語也
有曰四平市
靜者以一爲億多嬌二爲耳邊風三爲散秋香四爲思鄉馬五爲誤佳期六爲柳搖金七爲砌花臺八爲弱陵橋九爲救
情郎十爲舍利子云々隱語こいふいふ商人の符牒なり又この憶イニシヨミ耳散ニシヨミ思談ニシヨミ柳砌ハスナツツ救舎ハスナツツハ數目
て拳にうつ唐音是なり(拳は無ありウ、といふ今二をリヤンといふ雨の音なるべし二ハ六と紛れや
すき故お雨お代たるか又五をまといふのスイリーなどの引く音のウと紛るふよりてなり)類柑子ニシヨミお成
第宅のどをいふ内から國のうたを扇ふうつし拳といふ酒のみかハして松落葉はやり歌かんふうらん替り
ヤンシウウスンイロマリヤンケンクニコタマサンナエマサンナハラリトサケノカンオナツト梅ノ花トウ
ライキウコ五ウリウヌウこれら訛りてさまといひひしなるべし吉原などおも享保中お拳相撲といふと
はやりて遊女玉菊これを上手おして拳まはしといふもの有とて手履めくものを奇跡考お載たれとこの頃
いまださばりの行いれざりしと見えて延享三年丙寅吉原細見虎ク文といふに拳の圖解委まく出たり
いれバ彼拳まはし後の物なるべし明和七年辰巳圖と云冊子お拳すまふ有しとをいへり江戸名物鑑拳すま
ふとありて其句木うしや指て戦ふ秋の雲唯拳を打つも拳すまふなり觀希言ク繪圖ふ相與揖讓而坐拳杯便
云好酒用拳作馬互角勝負痛飲狂歌宵向分矣清商これを化拳といふ俗なり掛戦といふべし秋坪新語偶赴
友席有伎四座喧譁飛鶴掛戦履鳥交錯また虞初新志(注价三儂自序の内)拉客中之豪者並爾掛戦不已とあり
件の拳よりさまの拳あれを行へるハ狐拳なり蟲拳などハ童部のみすなり掛指を蛙食指を蛇季指を
蛙輪とす相制するもて勝負をなす圍山叢談お托胎蟲制蜈蚣とをいへり托胎ハ土嶋の一名也義殘後覺ふ

さるもの枚舉しぐたし是を何とういはむ十字の蒸て折たるをいふ職人盡の給ふ饅頭の頭ふ朱の點あり是も點ふのあらじ十字なるべし(高野山の戒院に宿りしうば饅頭の頭ふ紅みて印をおしたるを出せり是も其遠風う)萩原隨筆お智恩院の御忌法事お衆僧へ引饅頭面ふ紅粉を点するこれ十字引の遠風也と云と有り折たる状を畫るもいとおかしき足さなり昔し饅頭へ賞斷したる物なり貞順條々聞書お折の内ふていち上りたるのまんぢうの折おていと有りても知べし堀河百首題狂歌松まんぢうのかさりあさせる枝みれば違きわこやの松の物か(あこや今いふまんぢ子の小きなり)古畫は饅頭屋の跡をうきたるふ手桶お草木の枝をさして看板のやうふあるのかいまきふ用る故なり(食物の何ふよらすむくしのみ亦然り重箱などふの四隅あいたたり)上ふ引る歌のたいたう餅の下學集増補ふ大湯餅とあるものふや

○點心の野客叢書お漫錄謂世俗例以早晨小食爲點心自唐已有此語鄭修爲江淮留後夫人曰爾且點心或謂小食亦罕知出處昭明太子傳曰京師穀貴改常饌爲小食小食之名本此といへり空心ふまつちとむり物くふを點心といふ今俗お虫おさへといふ類なりまゝお飯後ふくふ物をいへり是も食後小食といへるお似たれども食前よもあれ食後ふもあれやう／＼空心なる程ふくふ食なるを數多の料理喰て間もなく又食とひ物をいふハ點心の本義おあらじ又佛事法會の終日の勤行お氣を屈する故種々の物をこしらへ備るをもいへり茶食といひ只うへれども饅頭などいづれも用べし此おて點心お用るハ大うた羹の類麵の類よ菜を添て食ひ湯を飲とあり尺素往來ふも點心者先點集香湯而後水蟾脾雞鮮羹猪羹腸羹羊羹海老羹白魚羹寸金羹月風羹雲羹羹羹羹三峯尖菓子麵乳餅卷餅水品包子砂糖饅頭餅饅頭等又素麵者熱蒸截麵者冷濯不可過此等ハ云々點心菜者不要多矣生薑薑雞冠苦冬瓜藕根菱荷酸茨等之内三種計可設之於點心菜巨數事者

賊元弘様當世物笑いとあり禪宗行はれて是等の食物の法も傳へたるなるべし但しもの魚獸の肉を用ひしを僧家ふり是を除きて製方をかへ又この人の口おかなふやうおなし又ハ其物の形色の似たるふよりて名ある物も有べし後ふの名お同くて物のいたくおられるも有とみゆ今の羊羹などは是なり庖丁聞書お魚羹といかんを魚の形おして盛籠足指すなり惣して羹ハ四十八かんの拵やう有といへども多ハ其形おりて名有云々あるふて知べし乘種錄お金門齋節を引て云洛陽人家重陽作迎涼脯羊肝餅と今のやううんは是やおやといへり元弘様といひ傳ふるハ後醍醐の御代にハ殊お此饗應行はれておまたの菜を出しお習と見えたり件の點心の内水蟾ハ水織なり後撰夷曲集この葛の味もよしハ名物とくハぬ先より誰もすいせん是葛さりなるべし今すいせん巻とて製するもの有て葛まりと別お心得るハ非なり(水蟾と書たるハ定のかへるのやうお作りしも有べし)安齋云籠羹ハ摺立の山の芋一升お砂糖一斤赤小豆のこし粉一升小麥の粉五勺煉合せ蒸て龜甲の形お切なり菓子麵ハ小麥の粉を水おて固くねり板の上おうすく伸し細き竹筒おて押切れお基石の如しそれを煮て豆の粉をかくるなり卷餅ハ今世けんひ焼といふものなり小麥の粉水おてねり砂糖を八板上おて薄く伸し平なる銅鍋を油おて拭ひおて焼其面お醬油をぬり片端より固く巻て小口切おするなり又尺素往來お茶子者荔枝龍眼胡桃實榛栗子梧桐子烏芋海苔結昆布漬子刺解菱申柿搥栗干松茸干竹筴乾胡蘆乾蘿蔔炒付引干苦菽與米炙歎油物等云々これをみれば親元日記に筍干一箱進とあるもの茶食おも用ひしおや乾胡蘆ハ今の干瓢なるべし正月蓬菜お盛ものハみなそのかみの常の茶子なりろの内昆布ハ京雜波おハ今も專用古風の存するなり苦菽ハ醒睡笑お青苔を熬豆おつけたる菓子太閤の御前へ出したれお幽齋公お向いせ給ひおふとくし有し時君お代千ハ代ハ八千代おさしれ石のい

とはとなりてこけのむすまめこれ今もあるしんせい豆といふものなり雍州府志ふ炒豆ハ北野眞盛寺の尼
黒大豆ヲ炒芥の葉を磨り水ヲ解て豆の衣とす別ハ梗餅三分許四方ふ切り蒸て炒豆ハ雜て紙囊ふ入て檀
越ハ贈るこれを眞盛の衣豆といふ四角ふ切たる餅ハ假もちをいふなり是を假といふも古き名なり櫻井
基佐ガ發句ハ老松の葉ハはさろひや假餅諸艶大鑑内儀も手拭ふおられ大豆などいりませし菓子袋のと
まむけといへるも是なり但今の製大葉芥の青粉ハ用ひず青のりを粉ふしてかくる假を雜へざるハ眞盛寺
の本製よりも却て古製なり興米ハ著聞集ハ法性寺殿元三ハ皇嘉門院へ參せ給ひけるに侈くだ物をまいら
せられたりけるふをこしこめをどらせ給ひてまいるよしとて侈口のはとあて、おざりくだうせ給ひた
りけれハ侈上のきぬのうへふハら、とちりか、りけるを打ハらせ給たりけるいみじくなむ侍りける
和名抄ハ粗粒巨女二音和名於古之古女文選注云以蜜和米煎作也とあれど今諸書ハ載るハ以蜜和米麵熬煎
作粗粒とあれハおこし米ふハわたらぬなり桂川地藏記ハ道徳興米通世粽とあるハされたる名と聞ゆ雍州
府志おこし米の義をどきて是自粘固之中挽與之謂也といへりおふふ米を蒸密又入麴となすを俗ハ寐か
すといふ是ハそれよのりて米を蒸てふくらますふよりておこし米といふ歟料理集ハ蒸以仁おて作る
よしをいへれどそれハ後の製おて名ハ負す歟ハ今も燒麩なり油物とハ油にてあげたる菓子上にいへる
からくだものなり後撰夷曲集つかみちらす龍の玉おしなりハ似て其名も雲をおこし米哉
○燒米かれ飯の上品なるを河内國道明寺おて製する故道明寺といへハそのと、なる洛陽集ハ引飯と有て
道明寺喰ても涼し備後砂(翻春)
落くば物語かうなせもの侈許ふくだ物とりふやらんとて何もあらん物たまへといひふやりたればるぶく
ろニツしておかしささまおして入たりいまひとつの大さやうなるふハさま、のくだ物色、の餅うすき
こさ入て紙へだて、燒米入てこ、にてだにあやしくおきたしき口つさなれを對おてさへいかみ見たま
ふらんハづかしう此やいごめハ露といふらんハ物したまへといへ(露ハ下女の名と聞ゆ)
○中頃、名ハ隨へハ蒸菓子ハと點心ハ屬し干菓子ハ菓子といふべけれさうのかみハさふあらずなへて
くだものといへり源氏物語若菜上つこいもちひなしかうしやうの物ともさま、ハはこのふたともふど
りませりうき人々をそれとり給ふ空穂物語(國ゆづり上巻)繪更りごみきつハいもちひなど奉り給へり集
古圖の中ハ椿餅の圖あり椿の葉二枚の間ハ餅あり河海抄ハ椿の葉を合せもちひの粉ハあまつらをかけて
包みたる物なり

○祇園物語ふあたりなるやさもちひと申もの一ツまいるべくもやハ云々老人ひとつとりて手の内また、
かみおはえよく見れば中ハあづきをつ、み上ふすやうは餅をこりつけたり是ならハ小豆とてこそ
賣べけれ餅と名をつけていつのれる事こそけいなくおあしひとつふかゆる物たふかゝるいつハり多
けれバまして外の事よろづ輕薄ならぬハなし云、有て下文ハ鶴やさいらす皮の十字のたぐひならんあま
りふけいハくなるふよりて翁の涙なりし感せられいも理りなりといへり鷹筑波集音たかさよくふふけ
るうつ、餅洛陽集二口屋修符をいそと鶴餅かゝる句もあれハよ菓子屋ふも作れりとみゆ紀州道成寺の
番寄物ハ女の路ゆく處ハ從者餅を薦めてふくたやしなハせ給へどあるも此たぐひの餅なるべしそれ、
草(乙州の作)藤森の店ハ十禪寺の鯛はれ草津の姥ハ餅ハ利得少なから然も富り炮烙の一倍とて賣だふす
れハ利ありといふ此鯛はれといふハ餅の名ふまらず名所圖會大津十禪寺の處ハ鯛はれ茶屋とあるのみ

ふて何のよしも見えずさて伴の鴉燒とハその鳥の丸くふくらかなれば准へて名づけたる歟後世はらぶど
といふ餅是なり皮うすくして餡ハ赤小豆と搥のみ入て砂糖けなく唯大み作りたるものなり大ふく餅とも
いふ後其形を小さく作り餡もまじ粉ハ砂糖を加へざるを専ら大福餅と呼はらぶと餅ハ近頃迄もありしが今
ハ絶たり又江戸にて今自在餅といふ餡を餅の上付たればあころ餅の大きななり祇園物語又云出
雲國ハ神在もちひと申事あり京にてせんさいもちひと申ハ是申あやまるふや十月ハ日本國の諸神みな
出雲國ハ集り給ふ故ハ神在と申なりその祭ハ赤小豆を煮て汁をおほくしすこし餅を入れて節まつりハを
神在もちひと申よし云いへり此事懐福談大社のことをかける條も云すされど大筑波集ハ出雲への留主
もれ宿のふくの神とわれバ古きいひ習ハしと見ゆまた神在餅ハ善哉餅の訛りふてやがて神無月の説ハ附
會したるふや尺素往來ハ新年の善哉ハ是修正之祝着也とあり年の初めに餅を祝ふことハ聞ゆ善哉ハ佛語
みてよろこぶ意あるより取たるべし鷹筑波集よきかなや影もせんさいもち月夜これ善哉を音訓ともみ用
たり後撰夷曲集ハ大納言の小豆おにたる物なればせんさい餅ハくぎやうふて喰へ(貞徳)一休物語或人
一休といふ名の由を聞て歌よむを一休さましりし善哉とよとて尻餅ついてよろこび給云(貞徳が淀川ハ
咄まむ時尻もちつものなり云)まれば善哉餅をわやなして書たるなり赤小豆をこし粉ふせざる汁ハ餅
と見えたり又洛陽集ハ日蓮忌ハ影講ハ他宗のうらやむせんさい餅(高成)今ハ赤小豆の粉をゆるく汁ふし
たるを汁粉と云ども昔ハさみあらずすてよといふ汁の實なり寛永發句帳ハ名月(幸和)芋の子もくふ
やまるとのもち月夜又油かすお揚られん物かやたいハおくまじやしるこの餅ハ箸うへてだせ又すハだ
んごハ今と異ならず料理物語よ出たり但し餅とらると四六わりの粉にて作る洞房語圖饅頭賦あんころハ

しハ痞ハ持お嫌ハれ汁粉もちハト戸ハ叱られなさいへるハ今と同し又ぼたもちハ宗因千句あだなのみ
種ハふいねの野への露菽のもちなしおみなへしなら(今女詞ふお菽といふおみなへしも菓子なり)

○かき餅といふハ二種有り搔餅と缺餅となり搔もちハ又二種あり徒然草ハ最明寺入道鶴夕岡社參の次ハ
足利左馬入道の許ハ先使をつかひして立いられたりけるあわるとまうけられたりけるやう一獻ふうちあ
わハ二獻ふえハ三獻ふかいもちひあてやみぬ云々交談抄ハ俗ハ菽の花といふ物なりとわれハ今世のぼた
もちなり屠龍工隨筆ぼたもちハ牡丹餅なりとおもひしふさハ非菽を拵たといへバ直ハ菽もちといふと
みておはぎといふおなじとなりと上達部の娘の老女となられしが語られしといへり按るふぼたといふた
るを云なり又連歌のうハ奉加帳たす隣不知殿といへることを取てよの異名とするハよくつうぬといふた
どへなり又蕎麥かきをういもちといふ立官法印の狂歌有り(前のそバ切の處ハ出す)正章千句ハ新發意を
そハのうしぬるうま職主煖酒も過すういもちハそばがきのうたなり寛永發句帳ハ十五夜月蝕ハ(慶友)
まん丸な月かきもちの夜食哉餅を手よて缺ゆふ名付そハ古き習なり埃囊抄ハ二人むかひて餅をひきと
るをバ福引と云ならハせるも故なきふあらず(全文寶引の條ハ出)是ハ今江戸の俗おそなへくづしといへ
りかき餅ハ別ハ海參餅とてその形お作り刀おて薄くきるをいふ故なり是又二種あるお似たり雍州府志に
甲冑ハ供ふる餛餅ハ刀をもて截るといふ事を忌故手おて餅を破一片づハ缺ふよりて缺餅といふ今ハ一切
缺もちといふ圓山安養寺并双林寺靈山正法寺の僧臘冬ハ餅を製し薄く切三寸ばかりの長さなるをかげ干
ハし遠火ハ焙り時ハ置て賓客ハ供ハす他ハ製すれども是ハ不及故ハ圓山缺餅と稱す近世筥おつめて遠方
お送る方物とすといふハ是圓山かるやきのもとなり

○窓のすきみ(二)土井大炊頭利勝朝臣大老たゞし時ある諸侯老臣たちに請れけるハ近き内ふ茶を参らせ度い出被下べくやと申されまかバ朝臣をはじめ各一同ふ是ハ興あるとにハ其日皆参るべしと約束ありてその日諸老うちつれて行向ハれければ主人門内へ迎て添よしを述べ書院お招じやがて数奇屋お入られけるお小き重箱ふりひもちひ五ッ入ふたの上ふ楊枝を添て出されけりさて有て主人茶をたて、獻せられて事すみぬ四方やまの物語おとさうつりて各うへられけりつれ、草おかけるかいもちひのと質素なるをたうどく覽えしが此ころの風俗いふしへにまどならず今の諸侯まさおまられんや

○雍州府志云煎餅ハ六條にて製する故六條せんべいといふまた其邊醒井にて製する片餅も同じ類にて近江國醒井にて作るものお做ひたるなり煎餅ハ火を經る故面鬼面のごとく膨脹たり故に鬼煎餅と呼片餅ハ火をあてずして賣求人くふべき時焼なり輕燒氷燒雪燒等々、近世處々にて製すといへり醒井餅ハ名物なり望一后千句更行バ目もさめぐ井の冷やかお宵おつきたるもちひなるら煎餅ハ宗長紀行上巻人のもとより篠粽せんべい二色をおくられしお心さしみやまおまきき篠ちまき數ハせん秋せんべいおして錦繡緞六條の揃や詠めん花くもり(其角)煎餅賣お干す雪の春草(沾蓬)むらしの煎餅ハ鐵の摸カマにて焼やうの巧となるとなし尤草子おさる、物の内ふせんべいハ竹の筒おさるといへバ筒お入て扱て截たりどみゆ其焼とみろを人倫訓蒙圖彙おうきたり火鉢を助炭の内お置火筋おて餅をえさみて焼なりやきたる處蝦蟇の背のごとく疣瘡出來るにより、鬼煎餅と呼其碩が賢女心粧ふ泉州高須の事をいふ處所の名物鬼煎餅を賣る云々其繪をみるお餅入たる籃と助炭とを一荷おして負たりいづくも此やうおして賣ありさしガ籃緞輪お勇角おいろは五十韻お世にたりを痴氣おさせず煎餅賣といふ句ありまの頃上野の山下にて沙糖入

のかき餅を火筋のとき物の先を二ツお割うけたるお餅を挿み焼て賣ものをみたりこれ往昔の製お似たり又搥せんべいといふものむかし煎餅おて(沙糖)入る、も入らぬも有べし、癩れて後近在ハ稀お見えしとこの頃ハ江戸も流行て本所柳島邊おて多く作り所々の辻おてだぐわしと、同く賣また神佛の縁日おも持出て賣まの故おや近ごろハ罌粟燒といふものすくなくなれり醒井餅も近ごろ江戸おて五色かき餅など、て有しが售さるおやなくありぬ寛永發句帳お(圭球)さかり過て色やさめが井もちつ、ヒ雪燒氷燒ハ輕やさの白色なるをいふなるべし江戸名物鑑お(寛延)ごろより明和の初めなり)木葉せんべい歌せんべい(百人一首歌うるたの形なり)又若荷屋の輕燒お皆おくへと誓願たてし輕燒のてんと身帯のはるめうぐや(はやりし物と見えたり)其外吉原煎餅淺草餅お出たり菓子屋ハ上野山下の金澤のみなり

- 麩のやき 朝貞經卷 助惣 銀細 金つハ 丁金やき さ、餅 白糸 おこや あらつき 龜甲
餅 おんひん いまさう 米饅頭今とハ形異なり 洲濱 豆餅 いぬま餅 矢口餅 亥の子 黒
もちの紋 花のくだ物 宮笛 花ひら菱餅 はなくそ 御福 目黒の餅 餅花 算木餅 青ざし
金米糖 落雁 羊羹 正徳中の菓子おも 南蠻菓子 百一口のくわし

麩の燒とい物の名とも聞えぬ呼やうなりおもふお燒麩といふ物あるうらまがぬやういひたるおても有べしむかしハ兩度の彼岸の内佛事おは是を作りしとろ小麥の粉を水お解やまなべの上おてうすくのべて燒たる片面お味増をぬり卷て用これ上おみえた、けんひやきなり池田正式が狂歌合お朝貞の花ゆづらし泥ふのやきもひなたお置バねぐさくどなる嘉多官(四)女の詞お麩の燒を朝貞といへるハ火おておふり侍ればまほむよて朝がはの花の日おまほる、故お名付をりしといへるハ如何花車なるやうおてさるし

婦遊笑 卷第十上

き注なるべし只人のつくるをぬ朝の良のやうなるどの心なるべしといへるに焼たる面のきよらぬなり
懐十集明なべ顔のみつちや見えましといふ句は(一箇)玉くしげふたをして置麩のやきふ又鶏の空音と
共お経よみてといふ句(弘永)世に逢坂の關のふのやき雍州府志に麩のやきの巻たる形に經卷に似たる故
ふこれを食ふに經幾巻を讀といふとあり是より經讀といふに麩の焼を付たるなり賣倉ふる巻作麩焼
稱御經とみえたり江戸にて助惣といふに總鹿子麩の焼麩町十一町目助惣と出どの家今ふあり(十五六
年前迄いといと下品なる物なりしが近頃世の風ふつれてこれもいとよく製して昔の風味あらしむ)雍州
府志に焼餅の米の粉を煉餡を包みやき鍋にて焼たるその形をもて銀餅とも云と有り今のどら焼へ又金餅
やきともいふこれ麩の焼と銀餅と取ませて作りたるものなりとらとに形金鼓に似たる故鈕と名づけし
ハ形大きなをいひしが今ハ形小くなりて金餅と呼なり(同じ物なれども四方を焼たるを餡を常のより
ハよくしてみゆよりと名付しハ淺草の馬道に始て出たり享和のころよや予ダ先人なども知りたる者の思
ひ付なりしそ程なく無なりしかども其名うせず所々ふまれを作るその頃元ハなくなりし後なり澤村
田之助みゆよりといふ歌を所作事おしたり)

○米の粉の焼餅江戸惣鹿子増補深川萬年町雁金焼とあり是今あわれども當時ハはやらぬものなり焼餅
ふ遠雁の模あるふて焼たるなり(米の粉なまの粉なる故火よく通らす)今其製ハ殊なれども横雲といふ
ハ麩のやきなりまいた巻といふ類助惣より出たるものなり(其もとハ是も麩の焼なり)

○白石の餡餅の形を云たる(前ふみゆ)ふさ、餅の中おさる形なるがありといへりさ、餅をいんこなる
べし料理物語に見えたり染て色々ふ作れば定りたる形なきふや作りたる形ふ付て白糸あこやなど名付續

山井餅雪と白糸となす柳かな(松尾宗房)白糸の餅赤小豆を付たるを藤の花といふ(繪行器の處いへ
り)藤の花また藤の實とも云ふや寛文元年成安撰める埋草藤の實の咲かば鞍おげまんと馬と云嶺句あり
又まんと馬ハ毛吹草おまこん馬も今やひくらんもち月夜など出たり馬形造りたる眞粉なるべし又馬形な
らぬとも後お白糸餅をやせうまと呼これハ餅のうまま馬といひ細きもの故瘦といひたるなり灯草をやせ
男と云と同じ又まんの鳥の後いへり

○あこやハ圓珠庵雜記ハ伊勢ハ女の足さあちさう、つくしき團子をうりありくしてあこや、くめさ
ぬさといふよし或人かたり侍りさあこや玉に似たる故お名を移せるなるべしさ、餅ハ洞居語圖餡餅賦さ
つさ餅ハ其性硬ふの團子より出てあるへいダ尻まひするものなり又まんとをわかつかといふとハ安井了
忠ダ狂歌ふやき餅のつめたさよもやいらうなわかつかをかりよき物ハなし是赤小豆の付たるハわかつ
きなりそを深更となど、のやうに解たるハ附會なり故ハ風俗文選ふも毛統ダ赤小豆賦あかの仇名と
しり云々深更とは理屈人の名づけ名おして云々

○龜甲もち地錦抄ハ藪菰ハ柿葉の小さく中ふ三筋あり秩父山中の農家客ある時ハ小麥の粉を水ふ煉り
丸くちぎって此判の葉を兩方よりあて柏餅の如くふして炮烙ふて焼て饗應す葉をとれば餅ハ三條の紋見
えてあいらしきものなり是を龜甲餅といふ此葉をかめいむらといへなり(近年隅田川長命寺の内あて
櫻の葉を貯へ置て櫻餅とて柏餅のやうお葛粉にて作る始めハ粳米あて製りしがやがてりくかへたり)

○寛永料理物語ハ杉原餅と云あり杉原紙をよくむしりうるもちとの粉を四六ふ混てこね合せ製し六月
用る由いへりよりておもふお著聞集ふさだの智了房と云者能書あてありければある人古今集をうつま

婦遊笑 卷第十上

てたべどわつらへし小程も書ざりければ主かさねて今しか、すともうへし玉べしと云ければ智了房を
たへけるハ過ふし頃病病をつかうまつりし紙多く入り術盡て料紙をみな用ていなりと云ければぬしいふ
ばかりなくおほへて本ハいんそれをかへし玉へといひける。智了房其とも紙みそうつみ
なつかうまつりていはいうしていへきと(みとうつハ雑炊なり今も加賀越中ふてさうすいをみそつ
といへり紙みそうつハかの杉原餅の如きものを表たるおや前ハ痢病のとをいへれば其藥食などふてもあ
るか)

○あんひんの餠餅の音なり又なんひんともいひしおや類柑子ハ朝更ケ徒合の句田舎タのかぬ手拭のたて
たべつけぬなんひん餅を忍ぶらん關西よてあもと云ハあんもちの略なりいまさかといふハ定うならず文
字ハ美作なるべし嘉多言ハ美作國をいまさかハわろしどあれハ専いまさかといひたることまらる但し餅
ふ負せたるハいかなる故お世ハ南鍋町をひや作兵衛が餠餅よりけりハふひ作餅ともてはやしたる
より起りていひ誤りたる言なりともいひ又越後家へ立入もちやのもちより美作と稱したりともいへり非
なるべし

○餅ハ小麦たんどなりそれより轉じてつくねたる物を餅といへりだんこの餠字もちハ養字なり漢土ふて
十五夜ハ月餅とて小麦ふて製するとありよりて和訓葉ハ餅をもちひと訓ハ望飯なりといへるハ非なり和
名抄ハ糯をもちのよねと云るハ米の粘る者といへり是もちの義なり故ふこハ餅ふまれ養ふまれもち
と云ハ餅字を通ハし用ゆ

○米饅頭ハ小麦のまんぢうお分ツ名なり米といふより其形をも米粒の形よ作りしなるべし江戸鹿子ハ後
草金龍山ふもと屋鶴屋と有り紫一本ハ根本ハ鹿の鶴屋うみぬらん米饅頭ハ玉子なりけりといへるをみれ
バもどハ鶏卵の形ふしたるか但しもどより今の形なるを狂歌ハ鶏子おどりなしたる歟江戸土産ばなし爰
の山の麓ハよねまんぢうハ江戸ふくれなき名物なり一とせハ小歌ハ金龍山で同道しよもどりグひもじ
かよねまんぢうとうたへりされど料理物語にけいらんもち米六分うるの粉四分をこね黒砂糖をあんふ
してさんかん程丸めやで汁ハうらん同前(これ後世けいらん温飽とてうどんふて製す)物類稱呼筑
紫ふて鶏卵といふあり江戸ふていふ米まんぢうの丸き物ふて今江戸ふていまさか餅といふふ似たり然
らバ金龍山ふて賣しころのハこの形なるべし又漢土ハ臥饅頭といふハ今よの常の饅頭歟其故は饅頭のハ
ど丸きものなりひめまんぢうハ今の花もちふや矢の根鍛冶後集よき作意とて譽られけり先假りお姫ま
んぢうの釘隠し但しまんぢうの小ささを云ハ花餅は前ハ見えたるさハ餅なり

○すいまハ洲濱ふて其形ふよりの名なりもど餠ちまさなり麥芽大豆を粉ふしてねり竹箨ふ包みたる物
なり又豆餠ともいふとなり今も大豆粉を餠ふて煉り茶食とするもの是なり

○いぬま餅ト義狂歌集いぬま餅といふものを出しけるよ白き黒き色々の餅なり云々按るハ搦尻ハ武將の
御符の時ハ山神祭矢口祭といふ事あり折敷一枚盛餅三色餅數九枚黒餅三左赤餅三中白餅三右餅長八寸廣
三寸厚三寸右三枚折敷如此調進也射手躊躇して白餅を取て中置赤餅を右置其後三色各一ツ宛取重
ね(黒ハ上赤ハ中白ハ下)座の左ハ候して山神を祭る次ハ又前の如く三色を取り重ねて自三口食を(始餅
の中次ハ左麻次ハ右の麻)次ハ微音ハ矢聲を發す次ハ盃酒其外故實多し傳へて知べし東鑑ふも此事あり
按するハ今世十月亥日餅黒赤白三種(朝廷如此)調進す亥日餅ハ唐ハ風といへども餅の製ハ矢口祭のそる



處ふ似たり亥ハ猪なりといへバ狩場の式を用ひ來るふや又衣襟の紋ハ黒餅あり是も中世の武士矢口祭の
黒餅を以て家紋とせし由或書見侍りしといへり東鑑(十三)ハ山神矢口等を祭らるゝ事ありて矢口餅と
も箭祭餅ともいへりされと矢口ハもと山口なるを其義を借て矢のかたふハ矢口といひしなるべし源氏
物語松風卷かくころハそぐれたる人の山口ハまるかりけれ云々細流ハ物のはじめを山口といふなり伊勢
遣宮の時も山口祭あり又鷹狩も先入ところを山口といふなりと有り又亥ハ猪なりといへバ狩場の式を
用云々いへるハうけ難しとは亥を野猪と心得たりとみゆ大なる誤なり亥ハ家猪よて豚なり引証も及バ
ぬ事ながら協紀辨方書(乾隆六年)卷一蠶海集曰十二宵屬子云々戌亥陰斂而持守狗爲盛猪次之故狗猪配戌
亥狗猪者鎮靜之物也ともいへりさてト養集いへるいぬま餅とハ其名のよしも辨へされと白き黒死色々
どハ箭口祭の餅ふならひし物といひゆまた黒餅の紋の説もいかにあるべきもとよハその餅あかたせらバ
拍子木のなりハ黒くすべきをさもわらぬハいかふや凡餅とハ漢土あても丸き形のものといへりよりて
黒く丸きものなればまかいへるよてともなるべし

○玄猪類柑子ハ或人近衛公ハ召れて御茶御菓子ヲ賜りぬ碁石の形して色々染たる餅きのふの御玄猪なり
し宸宴供拜の餘りなりと丹波にのせ郡久路の庄より御玄猪備へ奉ると内藏寮より是を行ふ安齋隨筆に
なりざり玄猪の餅のとなり碁石の如くまた餅なり京都將軍家の時より珍なりざりと云ふ蜷川親元日記
其外其時代の記ハあり將軍御手づから碁石を持つ如くハ指二ツハさみて諸臣ハ賜ふ遠國ハ居て在京せ
ぬ人ハ紙ハ包みて賜へる紙ハ引合せ金銀泥めて菊之のふいてふの葉を畫く切をぐも有夫に菊之のふい
てうの葉播まきよして餅六七ツ計り入て包む包み様有賜る人の名を書付命も禁中あてハ如此又同時代御

嚴重とも云ふ御玄猪の轉語なり能勢郡ハ津の國なり木代村ハ天滿の北七里あり門大夫と云もの數代住
居して恒例ふて毎年亥子餅を參らす赤小豆を搗ませてハ四寸長六寸五分深さ二寸の箱ハ入て固む上ハ
栗五ツを五角お置て蓋を蓋ふ云々木代村邊皆山城八幡の神領たり因て善法寺より搗之といへり

○花ハ山家集ふみやたてと申けるをしたるものとしたくくなりてさまうへなどしてゆうりにつさて吉野
お住侍りけりおもひがけぬやうなれども供養をのべんれうよとてくだものと高野の御山へつりしたたり
けるふ花と申くだもの侍けるを見て申つうハけるをりひつふ花のくだものつみてけりよしのハ人のみ
やたてよしてと有くだものハ圓扁ふして花瓣ふ似たるなり吉野あて春の頃花餅とも御福ともいひて賣る
のハ竹串を半途團扇の骨のこま細く裂たるふ小さ花ひら餅をさしたるなりハ江戸あて近ごろ諸佛の縁
日ハハ辻あて賣るものあり是なり下ふいふべしこれハもと吉野ハ華供といふ事あり又歳首ハ藏王權現
ふ備へたる餅と碎き他の米を加へ二月一日本堂あて諸人ハ施し又山中の僧俗ハ普く賦る是を餅配といふ
委しく滑稽雜談ハ出たり山家集ふ花のくだものと云るハ是なり洛陽集唐餅とせりかくれハ吉野山(友靜)
吉野山去年のまんとや餅配(自悦)もろこしの吉野といふ枕詞をわやなしてもろこし餅あひひうけたり
○ちまきハ種々製すれども常のハ角黍の名ハ似合す越後などあて作る篠ちまき又長崎あて作る竹
の皮ちまき三角なれば其形かなへり
○山家集ふみやたてといひしハみやげのといひへり今もみやげをみやどのみも省きいふみやたてといひ
やげだつ物あてみやげめけるなりおもふ土産をみやげといふハ宮笛あて王都より鄙へもてゆくをいへ
り都のつとふいさといましをと源氏物語も見えたりそれよりして神社などある處よりもてくるをも

通いしへるふや是を伊勢參宮より出たる詞とするはせまし(貞徳文集爲北國宮筭雜引云)又爲長崎宮筭雜引云(花ひらと云もの外ふも有り御傘花ひら僧衆の紙ふてまろくして行道の時ちらさるを云(是ハ散花をいへり)又正月の餅は菱花びらとて有と云り是今いふ菱餅なり五節句云餅を押たるなり菱あさる云但し昔ハ小さく作りしものとみゆ似せ物語ひひえたる餅花びらふなりにけりとも有こハ餅花や縁内の俗正月の餅花を涅槃會ふ煎て供物とし蓮の餅を作りて備ふるをいづれも名付てそなくをといふハ疑らくハ花供の誤なるべしといへり浴陽集涅槃鼻屎や濟度方便一つりみ(友靜)鬼貫が獨言に餅つき云幼き人の柳が枝餅ひしり付て花とみるよ云松務葉京童といふ半大夫翁さて初冬やうみな月つくやゐのこの餅なるも小春の名や句みらん御福の餅ハ神社佛閣何くもあり狂歌咄の六月萩のとをいふ處杜のはどりさし入より茶やの軒うこひつやけ青き杉葉さしかさね名ふかふみたらし團子はそき竹ふさして前なる土塗の爐立ならべたるハ五十申立たる心地すといへり昔ハ團子ふかざらず豆腐田樂などさへ爐立て焼たり此だんごハ小きものと見えて輕口咄ふみたらし團子ハ鉄炮の玉數珠の粒をろむんの玉などいへり江戸ハ團花万葉種(七)武藏國中名物部目黒御福餅江戸砂子増補目黒不動ふて飯櫃ハ白餅を入れてこふくの餅めせと賣る是も古き事なり參詣の聖此餅を買て犬ハ與ふるなり口寄草(元文元年刻)冠付ころろく目黒の犬も取つし衣食住記むろし替らぬハ目黒の粟餅三官館云社前ハ犬多く有て御服の餅とて挽ものふて拵へ少しひつ形ふして曲物の器ハ入女乞食賣て參詣の貴賤必求めて犬ハ給させける事ふて有し御鷹野の障りとて犬を符捨られしより御服の餅跡うたもなしといひしハ寶曆の頃なるべし粟餅と餅花ハ今ふあり寶永忠信物語夢をさせし粟餅や木毎ハ花の呉服もち又江戸二

色ハ目黒の土産二種唐とまど餅花を畫けり狂歌一日ハ八ツ九ツたう獨樂のたらぬ目黒の餅ハ花なる江戸名物鑑目黒もち花もち花ハ鼠のあらす梢かな江戸二色ハ畫きたる餅化ハ竹を細く擧きたるハ染たる餅を付たり又目黒のみもあらす手遊ハ賣しこともあるふや類柑子茅場町山王旅所の所ふまふちいちやうらもの有り色鳥ハ染餅を小申あさして云々いへりまんこ馬の類ふて鳥をも作りしハ餠の鳥の形なるべし色鳥ハ鳥ハ作りしなるへ然らばまんこ細工のもど云べし又ハ色とりと有しを鳥と書しもしるべからぬといづれも是ハ餅はなり其始ハ吉野の御福の餅ハ倣ひしものと見えたり餅ハもとより福の名あれど(埃囊抄など)そのよし見えたり御福ハ何ふまれ神佛ハ供へたるおろしを給へるをまかいへり著聞集ハ鞍馬寺の別當すハを人のもとへつかはすおこのすハ鞍馬の福ふていざさればとて又むりめですなすハハ小竹なりこハその筈をいふなりこハをなへものならぬをも其地ハ産する物ハ福といひしなるべし蜈蚣ハくらまの使者といひ習ハすこれをさへ福ともいひしとて此歌あり長崎時記諏訪社夏越祓御祓だんごとて門前より坂下ハ至るこれを買だんごを申ふぬさ或ハひさかきの枝ハ紅白黄の小さだんごをさしたり老婆見子みなこれを買てみやげとす又六月朔日市中家々贈をし氷餅とて正月のかき餅を貯へ置此日臺ハ盛り客の至る毎ハ是を出して相祝すとあり焼よしといはされバ其儘用るハや見るハかりの物ハて算木餅の類なる歟

○算木餅搥尻ハ伊勢宇治邊ハ年禮の客來レバ先折敷ハさんまちやうとて二寸ばかり割たる木二三枚とらみて結ひたるを置川作りうじなどをまじへまれと年始の饗とし次ハ辛かしら三ツ椀ハ入て寶珠といふこれをすゑわたし小紙一帖を以て引出物とす家の貧富ハより紙の大小多少ありといへり(紙をつりとす事

京師あても附り物もてくれバ其使ハ半紙をつうハす大かた一二帖なり是古の祿物の遺意なり江戸あハう
つり紙一二枚ふ過す下總市川の邊ふて新婦其近隣へ近付とて初てゆく土産ハ紙一二帖もてゆくなり
んさちやかどハ算木茶果なるべし伊勢ばかりの風俗ハあらぬハ花摘集元祿三年七月十七日算木餅を
文字にかさぬる灯呂哉(東順)これハ其角ガ父の預言なり灯籠の組子をいふなりもど茶果も漢土ハ其製ハ
祝允明撰談江西俗儉果權作數格唯中一味或果或菜可食餘悉充以彫木謂之子孫果合めづらしきやうなれ
ど今正月の蓬萊などの菓子ども食ふ者なきやうふなりしハ算木餅もかなじかるべし

○青さし春曙抄九青麥あて調したる菓子なり枕双紙三條のみやあハしますところと云ふ條あいどおかし
き薬玉ほかよりもまいらせたるあわをさしといふものを人のもてきたるを青まうすやうを艶なるすハリ
のふたみまさてこれませとさふらへんとてまいらせたれば(万葉十二ませとしお麥ハひ駒の云々)昔人
ハ花やてふやといそぐ日もわケ心とハ君を去りけると紙のハしを引やりてかへせ玉へるもいとめでたし
后宮の御歌みな人ハ薬玉の細工急々端午あ清少ハ曹刺を進らせて満足となり芭蕉發句説叢青さしや草餅
の穂み出つらん句解云青さしハ麥を煎て調したる菓子なり上臈もまこしめすハ枕草紙青さしと云物を
人のもてくるを云々二夜問答云此句意ハ麥の穂のわかさをすりてすこしくものを作る故よそれがはと
成て出つらんと云意なるべし時節の観想なり夏山雜談ハ青さしと云ものハ青麥あて製したる菓子なり古
へハ高貴もめされたる物なり今民間ハ用る青さしもこれなるあや

○金餅糖永代藏南京より渡りて仕掛色々せんさくすれども成がた唐目一斤銀五匁づハ調へけるお近
年下直なる事長さハあて女の手わさハ仕出し今ハ上ガたあも是あならひて弘まりける胡麻一升を種ふし

て金餅糖二百斤あなりけら一斤四分あて出来ける物と五匁あ賣ける云々昔ハ器粟を用ひかりしハ物
價今といいたく異なり

○落雁朱子談綺ふ軟落甘といふハ糕の名なりこの軟字を略して落甘といひしをやがて落雁と書とハなれ
り續山井落雁をみせぬかすみや菓子袋(直久)

○今の羊羹ハ昔の法ハ非ず明人ハ豆沙糕といふとなり宋書毛脩之傳脩之嘗爲羊羹以薦虞尙書云ハあるも
のハ羊肉のあつものなり菓子ハ羊羹ハ羊肝糕なり求肥ももど牛皮糖なると同じ獸を不潔とする故あられ
の字を書改めしならめハ羊字をかへさるハいうハ又羹ハ糕と同音なる故糕といふべきものをも誤りて羹
とけり

○和漢三才圖會載たる菓子どもハこるていまがりやうる(ミな花やうるの類なり)すえまハめ餡人參糖
あるへハ糖(糖)のやうあふくらしたると今いふたてまげも有り)うるめいら(今の製とハ殊なりすあめの
やうあ引たり)唐松あハハ(今大黒あ供ふる七色菓子ハもと庚申の菓子なり此類あみどりといふわり夷曲
集あどさハなる松のみとりも春ハへば今ひとしほの菓子のあぢハハと見也)衣櫃(源氏うやども云なり)
松の緑(上ふ出たり)遠摩隱(此も同類今も有り)ちまきまんぢうらくぐん白雪糕粗枚餡羊羹外郎餅求肥
加須底羅糖花小鈴(糖花の小者とあれバまれ今の金米糖なり然らバ糖花とあるハ今の大平糖なるべし後
ふ小鈴といひしものハ餠餅ハ衣うけたるなり名ハ同くて製ハれるよや今ハ是なし)煎餅(鬼煎餅なり)
松風松風とハうらさみまきの義なりとど裏の方白くして紋なけれバなり美作米饅頭大福餅(とらふどな
り)金鉦たんざり餡打ッ切り豆板大捨等なり今ハよき菓子どもハ大かた(正徳五年)昔なうりしものなり

求肥も元牛皮なるべけれいやししく開ゆる故文字をかへしなるべし羊羹なとをかへざるはいかみぞや唯
駄菓子ハかへらすそれも今ハ品數許多て枚擧ふ違わらずよからぬものを駄といふハ乘馬ふならぬ駄馬
より云ふや祐信が書の謎の冊子あかうまんのものどけりけて辨慶ととく心ハ七色かたても又蛇葡萄
の實のさまざまの色ふなるゆゑ田舎あて庚申の七色と云も彼もりのふよりてなり

○七色菓子今ハ甲子ハ大黒へ供ふれどもと庚申ハ供へしなり洛陽集庚申夜自悦夕句一説ハ七色賣や呼
子鳥とあり昔ハまれば賣者來れり一錢ふて七色を具す難波鑑などハ圖わり野葡萄の實ハ熟するとき五色
さまざまに染む故京師の小兒これを庚申の七色といふも彼菓子色ハあるふたとふるなり又思ふ今もあ
る十色菓子とて飴ふて作りたるものも七色より思ひよれるなるべし

○茶の湯の口取ハ煉羊羹うべたまなごハ紅粉や志津磨始て製す寛政の頃よりなり
○南蠻菓子ハほうるの類なるべし万治年間振賣の物の内ハあり(商賈の條ハ出)伊呂三絃ハ揚屋ハ行三ッ
取合のなんばん菓子を一人ハ一斤あてふわらし云ハ凡菓子何あても砂糖のすり蜜を衣ふかくるをてんふ
らと云蠻語なるべし小麦の粉をねりて魚物などあつけて油あけふするをも云ハ其形同じけれハなり
てんふらハこれもと寶石の名なるべし其さまハ似たる故の名ハ五雜俎(十二)今世之所賣者有猫兒眼祖
母縁頭不刺蜜臘云々また下文ハ紅刺一顆重一兩以上即值錢千緡然亦不可多得といへり物理小識ハ秣藨一
名紅珊瑚とあり

○東海道名所記島原の條門の内より半町あまり南へさがる右の方ハ茶屋なりうとんそば切やき豆腐其外
百一口の菓子あり百一口ハ數の多きといふ釋氏要覽道具部百一物大概之辭也薩婆多論云百物各可善一也
今江戸あて澤庵漬の間ハ搦手の茄子を入れて漬るを百一づけといふも唯數の多く入るといふなり冬瓜の花
の百一ハひだ花の多きといふ百一口の菓子ハ小といふなるべし今いふ南京らくぐんなどや

- ひきはし みづらち 昆布 國土菓子 一位の實 ホサノノ木 樞の左巻 玉章 氷豆腐 ころ柿
- かひ餅 くた物いとぎ 白強飯 くひ倒れ

源氏物語手習 中將小野の尼きみのもととふらひし處人々ふすいばんなどやうの物とハせ君もはす
の實などやうのもの出したれバ又夢浮橋ひさ度したてまつれたりつる返事ハ宇都保物語ハいろのおしき
四してひきはしとたものなど云々尺素往來ハ乾蘆蒲炒付引干とあるハ大根の引干ふや細流抄に海草なる
べしとありかやうハ物古く菓子ハ用ひたり京雜波ふて昆布を用るハ古風なり其内山椒を包みたるを菓子
とすこれをみづらちといふ油嘉須ふおもふ徳ハいはれざりけりみづからのこふの搦去ハ瓜はらみ菓子
かもひ出る人まつ前ハ數奇心むせふもうれし昆布ハ山椒をこたり草ハ昆布あて製するみすからといふも
のあり元山椒を入れて製せし故の名なり不見辛ヒメカサと書ておもをさるの外ハ辛きものといふ名なり今ハ唯焙燥
昆布をみづらちといふハあたらずと云り古くもみづからと書たればあながち山椒の有無ハいよらず菓子
として食ふ昆布といふ水より生ずる物といふ意も有べし其製色々あり松葉菜昆布道成寺といふふづ
ま上り有り朝夕むねをやさてふやゆふゆとぬりかもしてふ心あこめて結ひこふ云々古き物名の俳諧
ハ蓬萊の山ハこふかきところふや落くば物語ハまぎと云ふ女御厨子よりたらふ處雨ふとまりてまだうへ
らぬふかゆくハせんとおもふをなく土器少したまへさてハひさがしなせや残りたる少したまへといハ
ハ云やうたはらなる瓶子をわけてたいどりふとるひきはしをとるなり昆布なせふてもあるべし

○國土の菓子寛永發句帳より出す國土の菓子ところろな(幸和)佐夜中山集まばらくも國土の思は忘られず主の手よりも下さるゝ菓子(良庵)吾孺物語山海の珍物國土のくわしなぞいへるハ一物をいふあち新撰狂歌集内裡さまおくわしふ事ハよもかけじこくしそうじやう種々のなりものこくしどの國土の菓子ふや又菓子よて廣く雜穀をいふ歟松葉永閑ふし寛活一休とたらくさんの大山ふしむせうは、ひげふんさうこくどのべふをぬららし又土佐節草摺引長者のもどお打よりてこくどの魚のいぢりぐひあとはちやまの太ゆさん云々等もこくどの天下といふほどの義なり今ハ一種こくどの菓子と稱する木の實あり此木江戸ふなしまら木といふ物あて圓葉柿の葉お似たり實の形丸く中ふ仁みちたり熬てくふふ棧より味劣る多く喰へば下痢すといへり

○山女今昔物語(卷五)猿ハ木ふ登て栗柿梨子棗柑子橘柏椋椰子山女等を取て持來り散木集連歌ふ山女をみて仲實けふみれば山の女あをひけるつく野のおきなをどやかむとおもふふ新撰字鏡ふ蘭開音山女也阿介比和名抄藤和名土古呂漢語鈔用野老とあり油うす山のれくふハ何笑ふらんまつういふ見ゆるわけびが口あきてとある蘭ハ義を山女の陰あとりて作れる字と見ゆ山女と云も其意なるべし空穂物語としかけ卷ありしわらわいできぬれいのもどころやきうじとらてせてうせぬ

○發句帳ふまよりやへあがりてなる一位の實(親重)夷曲集ふ言總卿のもどみて標の菓三方ふもりて出けるふ狂歌とおほせけれとよみ侍りし(行風)百敷のお座にいちの菓こそ公卿のうへのくつひ物なれば草家の説ふ標ハくぬぎなりいちの標の類て郡武府志ふ載たる石標といふ物なり葉鈎栗シラカネよりも厚く血アケ棧よりも小く葉の背に白き毛あり實ハ標の實の長きが如く味柯シラカネの實ハ近し凡標の實ハ味苦澁して食ふ

不堪すいちのべうりハ食ふるハなりといへり又飛驒位山の一位ハ採なり和名抄ふ唐韻云採(音承漢語抄云佐久木)木可爲笏とあり笏あ作る故是を一位の木といふ上野あて蘇枋の木信濃みて峯せらうと云ふ木理直ふして色赤し故あすとうの名有り葉ハさやうぼくといふ木ふ似て長古事記傳ふ白檣と書るを白字ふよりてまらかしと心得るハ非なり唯かしなり書紀用明卷ふ赤檣此云伊知昆とわれハ古ハ赤檣を伊知比ふあて白檣をかしあてたりしなり然るふかし白かしと赤かしとある故白檣赤檣の字をれお紛れやすし又檣字ハ多く伊知比ふ用ひたるお此をかしに用ひしともありしあや近江國の神社の名甘檣をい必あまかしとよむべけれをなり云といへり梅窓筆記笏あ一位の木を用る事八雲御抄山部くらむ山飛驒六位笏木代之山也云々又三玉集飛驒の國司あて基綱卿位山の一位の木を笏の料みのがせられし時あみたへは位山峯ちうき迄我こえし道をを君が手ふどりて見よとあり云々和名抄お檣をいちひと調し松尾の攝社ハ檣谷をもちひだおとよむらハ往昔より檣をいちひと云う俗なるべしいちひのうな中頃よりいちひとけりといへり按るお和名抄木類ふ檣なし日本紀万葉等地名ハあり古事記ハ赤檣をよめり

○榎一代女(五)手元あい鹿籠もあるお栢カの殻をたばこばんふ捨云うやのみハ吉野高野を名産とす吉野がやハ左巻なり懷子集左巻をよしのよく見よ吉野がや(致也)

○玉づさ料理集ふ玉章ハうらす瓜のさねなりさんふんしともいふたまりよていりあけてよし其外あんえん桃仁くろ大豆から皮生姜なども加へてよし佐夜中山集玉章ハ添すとをくれ烏瓜

○貞徳文集修威嚴之水豆腐一筥給い今頃忙敷奇茶請之事關い境節修芳惠之段不知所謝い

○ころ柿乾たる柿をなべていふふ非ず雍州府志お宇治よて秋の初めふ小き澁柿と採皮をむき糖をとし繩

あつるし陰乾ふしたるが圓き故み轉柿といふといへり
○かひしき。くだものいそぎ源氏物語あづまや尼君のあたよくだものまいれり宮のふたお紅葉つたな
どをりまきてゆゑなりすどりませたまきたる紙ふつゝうふ書たるものくまなき月ふふとみゆればめ
といめ給ふはどあくだものいそぎみぞ見えけるに此の書が弁の方よりの歌み目をとむれば葉み心の移る
やと見ゆると草子の地のたふれながら此俗語ありしなるべし又あけ巻わあじろのひをも心よせ奉りて
色よの木の葉あかきませてもあそふ云よ是もうひしきなり調味故實まぎの別足を包むとの處下へをしき
なりつゝみたるのこうべいだんしういしきの葉はなんてんちく也云ふふるより南天ハ難轉の名詮ふて
鏡の背のもやうみ付又手水鉢の旁み植る(甲陽軍鑑九)勝時を行ふ處ふなてんの浮氷入と有なとふよ
るに)一代女(四)泉州界の處ふ漢の藤見あ大重箱ふ南天を敷て赤飯山の様ふして行ます云よ昔よりおな
し事ながら赤飯の弁當今ハ繁華の地ふ稀なるべし(萩原隨筆ふ京師ふてハ吉事ふ白強飯を用ひ凶事ふ
赤飯を用る事民間の習慣あり江戸ハ上ふて四月より八月迄白強飯九月より三月迄赤飯を侈用なりとみゆ
と有り又黄飯ハ瀬戸の染飯是なり東海道名所記ふ藤枝の瀬戸の染飯ハ此處の名物その形小判程あしてあ
へめしふ山梔子をぬりたりうすきものなり只し食料み作りたるふあらすと見ゆ光廣卿の歌みつくづく
と見てもくはれぬ物なれや口なし色のせとの染いひ)庖丁開書改敷品よの事鮑(海草)鱸(覆葉)鯉(桃花)
生鯉(庭床)鮎(藤葉)雁(水草)鶴(蘆葉)鴨(鴨)鴨(かも)だう(鴨)振笹(雲雀)地草(又葛芝)右之外鳥魚ふよ
らす檜葉を敷べし又年葉の改敷といふ事あり口傳どあり何ふよりて簡様み定めたるは覺束なし口傳と云
る年葉ハ鳥柴なるべし調味故實み見ゆ木ハ何ふても鳥を付たる木を云ふや饅頭のうひしきハ前みいへり

改鋪といふも假字書なるべし古くかひのかなを用ふれど誤なるべしかひふて飼と同意物のあへひ挿む
をかひ物といふ是なりくわへさすとなり
○俗諺ふ江戸の喰倒れといふもとさふあらず元祿曾我物語ふ實あまよと京ハ着てとて大坂ハ食て果る
とかや云々此をとりたるなり
煙草 烟草の禮式 させる廻し 長烟管(鐙) 煙の輪 刻み煙艸賣 薄色 嗅烟草 水煙 烟管通
○煙草ハ慶長十二年の頃はやりて其種を長崎櫻井馬場み植しとかや望一千句ふたをこやも君のゆ恩や思
ふらん治れる世の末も長ささ或書に其頃の日記お此ごろ多葉粉といふとこやれり是ハ南蠻より渡りたり
といふ廣き草の葉とさみ火をつけて煙をのひなり慶長十四年ハ荆茨組皮袴組とて徒者京都に充滿す五
月中七十餘人捕へられ頭たつもの罪せられ其餘ハ免さる組頭を左門といへり此者共多葉粉より組をなし
たるといへり此ふよりて多葉粉を禁せらる其時のさせる大あして腰みさし又ハ下人にもたせたりとなひ
刺菴瑣語烟葉出自閩中邊上人寒疾非此不治關外人至以四馬易烟一筋崇禎癸未下禁烟之令民間私種者問徒
法輕利重民不奉詔尋令犯者斬然不久因邊軍病瘵無治遂停是禁予兒時尙不識烟爲何物崇禎末我地徧處栽種
雖三尺童子莫不食烟風俗頓改(崇禎癸未ハその末年にて本邦ふハ寛永の終りなり)
○太閤の時の落書ふ大中庵立志云誹人さかぬものたをこ法度お錢はつと王のみこゑみけんたくのいしや
是ハ正徳四年八十二歳なる鏡目正順と云人の物語なりたばこ吸事被禁斷畢然る上ハ賣買者ども見付ハ
輩ハ双方家財を可被下也若又於路次見付付てハたばこ并賣主を所み押へ置可言上則付さる馬荷物以下
改出す者お可被下事但何地も烟草作べくらざる事右之趣御領内へ急度可被相觸ハ此旨被仰出ひ者也仍而

あつるし陰乾ふしたるが圓き故み轉柿といふといへり
○かひしき。くだものいそぎ源氏物語あづまや尼君のあたよくだものまいれり宮のふたお紅葉つたな
どをりまきてゆゑなりすどりませたまきたる紙ふつゝうふ書たるものくまなき月ふふとみゆればめ
といめ給ふはどあくだものいそぎみぞ見えけるに此の書が弁の方よりの歌み目をとむれば葉み心の移る
やと見ゆると草子の地のたふれながら此俗語ありしなるべし又あけ巻わあじろのひをも心よせ奉りて
色よの木の葉あかきませてもあそふ云よ是もうひしきなり調味故實まぎの別足を包むとの處下へをしき
なりつゝみたるのこうべいだんしういしきの葉はなんてんちく也云ふふるより南天ハ難轉の名詮ふて
鏡の背のもやうみ付又手水鉢の旁み植る(甲陽軍鑑九)勝時を行ふ處ふなてんの浮氷入と有なとふよ
るに)一代女(四)泉州界の處ふ漢の藤見あ大重箱ふ南天を敷て赤飯山の様ふして行ます云よ昔よりおな
し事ながら赤飯の弁當今ハ繁華の地ふ稀なるべし(萩原隨筆ふ京師ふてハ吉事ふ白強飯を用ひ凶事ふ
赤飯を用る事民間の習慣あり江戸ハ上ふて四月より八月迄白強飯九月より三月迄赤飯を侈用なりとみゆ
と有り又黄飯ハ瀬戸の染飯是なり東海道名所記ふ藤枝の瀬戸の染飯ハ此處の名物その形小判程あしてあ
へめしふ山梔子をぬりたりうすきものなり只し食料み作りたるふあらすと見ゆ光廣卿の歌みつくづく
と見てもくはれぬ物なれや口なし色のせとの染いひ)庖丁開書改敷品よの事鮑(海草)鱸(覆葉)鯉(桃花)
生鯉(庭床)鮎(藤葉)雁(水草)鶴(蘆葉)鴨(鴨)鴨(かも)だう(鴨)振笹(雲雀)地草(又葛芝)右之外鳥魚ふよ
らす檜葉を敷べし又年葉の改敷といふ事あり口傳どあり何ふよりて簡様み定めたるは覺束なし口傳と云
る年葉ハ鳥柴なるべし調味故實み見ゆ木ハ何ふても鳥を付たる木を云ふや饅頭のうひしきハ前みいへり

執達如件慶長十七年八月六日其後慶安四年辛卯町觸に烟草香の處家内み定め置いて其場所より外ふてたばこ吞ざる様可仕事

○大和本草の初め山州花山ふ刻み質を花山たばこと云ふ又吉野ふ植ゆ後丹波ふ植たり始め竹の筒ふ入て火を吸ひしが後真鍮のきせるを用ゆ受取足たしの禮あり今其禮廢れたり(昔々物語云昔の懐中烟草入といふとなく善惡共ふ亭主の烟草盆ふ入たる烟草をのひ今と違て亭主座敷へ出る迄は吞まて亭主物語して烟草まいれと薦む時客の先亭主よりまいれと盃茶の挨拶の如く二三度もいふ其時亭主鼻紙を取て烟旨を取リ銅をはづしきせるを紙にて拭ひ是よてまいれと差出す客取て戴きて吞なり烟草よく吞る一服二服も吸て拭て我前ふ置き歸る時鼻紙拭て烟草盆ふ入れ暇乞して立時亭主其儘差置れよと云近年の左様ふあらず不作法千萬なり)百物語或人たを好り此人烟草ふへ十損ありとて十首の歌をよみながらひたのみにのまれける其歌云々四しやひまやくいぞく使ふ日を暮したと故あぞとなつきける五そつと天下あかくれなき物をそれを破りてのひくせもの製草(寛永廿一年の撰)一人へ手もどふありしきせるの真中をつ取り一ツの指先あてきりくまへし(昔のきせるは今の番させるより長し)火ざらの中までまへしもてゆき又のみ口(今いふ吸口)際までまへしもどし良久しく幾度もかくせし座中の面々興を催す云々秋坪新語ふ呂惟精妻某氏賦咏長烟筒詩云者個長烟袋妝臺放不開伸時窓紙破鈎進月光來させるをきせりとも云り佐夜中山集金鏢八月猶たたかやまてた心こさせりも共ふ新らし昔の烟管ふ鏢あり(鏢は取置あなる是へ吸口の席ふ付ざる爲なるべし古圖ふみゆ)洛陽集ふ若烟草阿彌陀吹出すや孤雲の輪(如風)風流旅日記山科殿の下烟草の名物此きさみを吞で輪を吹ちちやつとさえず云)

○我衣ふ云貞享年中ふて刻たばこ見せ買バウリてせり賣なし葉烟草を調へ手前ふて刻ひなり然れども若き女中なごの脂ふうさを嫌ひ刻たばこやめて色黄なる和うなるを調のみたり元禄中より刻たばこせり賣出(箱の圖のり引出し多くありて提るやうにしたる箱なり)其後元又年中神田鍋町あ叶屋と云ふ刻たばこや荷なひ箱ふして六七荷出て江戸中を賣弘めたり寶暦年中ふの刻たばこは荷ひ箱となる(或人筆記云我等幼年の頃(寛保)の葉管筒の様な箱ふ引出しを付其内ふ仕切を入れ二行ふ刻烟草を入らひ手の環ありて此を肩あ片うけあし通行きて賣る右の環うちやくと鳴あ因てかちやくとたばこと云り此者五十年前以前より絶たり明和の初を云ふ又云我等二十歳頃迄はたばこ刻ミやう五分切と云てあらく刻ひを伊達とす近年の至てはとく糸の如く刻ひ別て近頃はこのまの木口をこすりてのみ見ゆるをこすりて云て賞美す)提る箱も稀あ残りたる今も有べし本所四ツ目の青物市あ毎朝その箱を提て出る烟草屋有り(忠兵衛といふ老夫なり)黄なるを薄色といふ六玉川ふせきの小まんもうす色をのむといふ句有り昔はたばこのむ女稀なりしとぞ娘容儀草子小昔の女のたばこ吞むと遊女の外に怪我もなうりしとなるふ今たばこのまぬ女と精進する出家の稀なりと云り漢土も亦然り尊贈養筆明末服烟有禁惟聞人幼而習之他處百無一二也近日賓主相見以此嗚嗚敬俛仰涕唾惡具始則城市服之已而沿及鄉村矣始猶男子服之既則偏滿閭閻矣習俗移人真有不知其然而然者多葉粉の漢籍あ見えたるを多く本草別集あ載たり又近年薦録めさまし草等の書われべそれらのとひみな省きつ

○一種喚たをこと云もの有り其器物紅毛の細工ふて犀角珊瑚など金銀を飾り精巧あ造れる物あり(其形圓扁よし昔の薙き髪水人の如く蓋の蝶つがひなり)香祖筆記近京師又有製爲鼻烟者云可明目尤有避

疫之功以玻璃爲餅貯之餅之形象種々不一顏色亦具紅紫黃白黑綠諸色白如水晶紅如火齊極可愛斷以象齒爲
匕就鼻嗅之還納于餅管內府製造民間亦或仿而爲之終不及此また鼻飲のたぐひなり秋坪新語天主堂ふて
鼻煙をもらひてかへりしとをいへり煙草錄(嘉慶庚辰刊本)金川瑣記云喇嘛僧喜拾煙草口内咀齧不用煙管
時々手搓少許納鼻中蓋俗尙鼻飲也また此書の内ふ舒位が蘭州水煙篇あり又水煙のを注して云案蘭州五
泉產水煙云々嗜法製小銅壺狀似雀葫蘆等式腹貯水實於壺背之管撮火吸之作隱々聲其壺約高二寸許吸管自
四五寸至三四尺水等今戲園茶肆廣場名勝遊手以裝煙媚客爲餬口計者偏地有之不獨吳中然也聞烟中有砒以
解水濕然久嗜之其毒入腦鼻中滴血亦最傷脇絡以喉間呼吸傷氣故也(先つとし予が家お近き田舎より來る
下女ありしが常おうくして煙草を咀めり)

○近頃異さまなるさせる出さぬ雁首吸口ハ常の如くらうの處内ハはりがねふて捲たるおや表ハちりめん
などのきぬふて包めり長さ五六尺より一丈お至るもあり繩の如く卷さる伸もすべし遊山などお携へて木
の枝お打かけまどひ付ても煙草を吸へし只一時の興おて脂をどをすともならねばやがて廢りぬ横谷宗珉
ハ彫刻の名手なると世お知る處なり煙草をすましうと脂のらうふつくをさらひて日毎お三四度づゝらう
とすげりへさせしどりや打開てハ奢侈のやうなれどをらうハ技を用ひしとなむされどもこハ一癖なり
人おすぐれたる處あるものおいかうやうのと何ものなりわろさくせと云ふおあらず
○させるとしといふもの昔もあり貞徳が油嘉須おかれすまがらすとをらさりけりませる洗ふ鯨のひげ
の短くてと有り今そりがねふて造れ共古製の如く鯨腮よて造らばよろらん

